

# 音楽の世界

## 目次

<b>論壇</b>	幼児期の記憶と昭和20年	中島 洋一	2
<b>特集</b>	芸術と教育		
	「芸術と教育」その背景にあるもの	高橋 雅光	4
	ダンサーを育てるために	井上 恵美子	8
	実社会と教育現場の温度差・鑑賞者を育てることの重要性	小西 徹郎	12
	教職課程と音楽 ～学生時代に身につけたい教養	武田 安史	16
<b>長期連載</b>			
	<b>音・雑記一ひなの里通信一</b> (52) . . . . .	狭間 壮	20
	<b>名曲喫茶の片隅から</b> (33) . . . . .	宮本 英世	22
	<b>音盤奇譚</b> (38) . . . . .	板倉 重雄	24
	<b>私とラジオ・ドラマ</b> (5) . . . . .	助川 敏弥	26
<b>海外報告</b>			
	<b>ザルツブルク国際夏期講習会</b>	草野 明子	28
<b>音楽会評</b>	広瀬美紀子 ピアノ・リサイタル	萩谷 由喜子	32
	松下佳代子 ローマ法王御前演奏記念 報告会&コンサート		34
<b>書評</b>	山田治生著「いまどきのクラシック音楽の愉しみ方」	中島 洋一	35
<b>コラム</b>	<b>IPアドレスって何 ?</b>	夢音見太郎	36
<b>短期連載</b>			
	明日の歌を 今井 重幸 その 6	橘川 琢	37
	福島日記(14)	小西 徹郎	42
	◆ <b>コンサート・プログラム</b> ◆ <b>～若い翼によるCMDJコンサート 5～</b>		44
	CMDJ 会と会員の情報		56

## 幼児期の記憶と昭和 20 年

作曲 中島 洋一

今さら隠し立てしてもしようがないが、私は 1941 年 11 月 19 日生まれだから今月中に 71 回目の誕生日を迎えることになる。一昔前ならかなりの高齢者だが、私にはそうした自覚がなく、意識の中の自分は、依然として未熟な青年のままである。しかし、近頃になって、幼い頃の記憶がより鮮明に蘇って来ることがある。

ヒッチコックのテレビドラマで、病床にある老女が突然青春時代の事を思い出すというのがあった。その老女は記憶喪失症だったのである。ナースが医師に「記憶喪失症の患者さんは、死ぬ間際に突然昔の記憶が蘇ることがあると言いますが、そういうことでは？」と問う。青春時代の記憶が蘇った老女は自分の手が皺だらけなのに驚き、「私は一体どうしたの？」と呟き、心配した医師とナースが病室を訪れた時には、すでに息絶えていた。

私の場合は、急に幼い頃の記憶が蘇って来たわけではなく、少年時代からずっと忘れることがなかった幼児期の記憶が、長い年月を経た今になっても色褪せることなく、より鮮明に思い出されるということである。

医学的には、三歳以前の記憶は、幼児期を過ぎると失われてしまうのだそうである。ではいつ頃が大人になっても残る記憶が蓄積される時期なのであろうか。一般的にはこの時期を「もの心がつく」というようだ。それは人様々であろうが、私の場合、昭和 20 年 3 月 8 日に、下の下の弟が生まれた日が、その境界線であり、その日のことは鮮明に憶えているが、その日以前の事を思い出すことができない。その時、私は 3 歳 3 ヶ月と 19 日だった。

その年は希に見る豪雪の年だったようで、表通りに面した二階の部屋に私といた姉に友達が声をかけていたが、普段雪が踏み固められて低くなっている大通りさえ、二階の高さに近づきそうな積雪があった。当時の出産は家で産婆さんにやってもらうことが普通だったようで、産婆さんに夕餉を振る舞ったため、産婆さんが持って来た焼きおにぎりが余り、子供達がお相伴にあずかった。焼きおにぎりの香ばしい香りと、中に細かく切った大根の味噌漬けが入っていたことを憶えている。すぐ眠ってしまったのだろうか、弟が生まれたことを知ったのは、翌日だったと思う。

時期は定かではないが、その年の初夏の頃だったと思う。母に連れられて空襲で焼ける前の長岡にあった父方の叔父の家と、母の実家を訪れた。叔父の書斎には、当時では比較的珍しい電蓄が置かれ、収納棚には 1000 枚くらいのレコード (SP) が収納されていると自慢していた。祖父が高給サラリーマンだった実母の家も、なかなか大きな家で、立派なオルガンが置かれ、当時はまだ女学生だったと思われる一番下の叔母に、何か弾いてくれとせがんだことを憶えている。その叔母も、今年 85 歳で亡くなり、8 人もいた私の伯 (叔) 父、伯 (叔) 母たちは、全て鬼籍の人となった。

7月12日には、中風を患い、裏二階で寝たきりになっていた私の祖父が亡くなった。家の者が「おじいちゃんが死んだ」と言ったので、裏二階の部屋に上がってみると、祖母が祖父の遺体に手を合わせていた。記憶の中の祖父は寝たきりで、私が近寄ると、微笑んでくれた姿しか憶えていないが、私が生まれた時、祖父が大喜びし、私に名前を付けてくれたことは、後に耳にタコができるほど祖母から聞かされた。7月14日、15日は町の夏祭りがあり、多分葬儀の準備などは慌ただしかったことであろう。

そして、8月1日、深夜に長岡に大空襲があり、私の実家の塩沢からも、北の空が赤く染まるのが見えたという。もちろん幼い私は、その時刻には就眠しており、見ていない。しかし、翌日、叔父家族が空襲の難を逃れ、実家である我が家に身を寄せた。叔父は顔に、同い年の上の従姉妹は、手に火傷をしていたことを憶えている。その日から多分半年くらいの期間、叔父家族は我が家に疎開することになり、その時の懐かしい記憶も色々あるが、今回は割愛する。

その空襲で、叔父の家も、母の実家も全焼し、叔父が集めた膨大なレコードコレクションや、美術品も焼失した。商人で経済力があつた叔父は、その後大きな家を再築した。しかし、祖父が病で倒れた母の実家は小さな家が変わっていた。母に連れられて幼い頃何度が訪れたが、私が小学生の頃、長男だった伯父（母の兄）が日光に転勤になり、伯父の家族と母方の祖母はそちらに引っ越した。

終戦の事はまったく記憶にない、というより三歳の私に戦争、終戦など、意味が分かる筈がなかった。玉音放送のことも、その時の家族の反応も後で聞いた話である。それでも、兵隊さんに逢ったら敬礼をするんだよと教えられ、敬礼の仕草を真似たりしていたのが、進駐軍に逢ったら「ハロー」と言うんだよ、に代わった記憶がある。

また、姉が戦後の昭和21年4月に小学校に入学した時、姉はまだ部分部分墨で塗りつぶされた教科書を使っていたのを憶えているし、「国民学校の一年生」という歌を歌っており、わたしも、マネして歌った記憶がある。変わり目の時期だったのであろう。私が入学した昭和23年には、教科書は戦後編集した新しいものになっていた。

3～4歳だった当時の私には昭和20年が特別な年だったということなど、まったく判らなかつた。ただ、小さい子供でも特別に感ずることがあると、生々しく憶えているものらしい。それほど数多くの記憶がある訳ではないが、他にも鮮明に憶えていることが色々ある。

私は、戦時中、そして終戦直後の記憶を持つ、最も若い世代に属する人間であろう。その世代も古稀を迎えた。しかし、幼い私のプライベートな記憶の中にさえ、時代を覗わせるものがあるように思う。些細なことでも、後の世に伝えておく意味があると考え、幼い頃の記憶を辿ってみた次第である。

(なかじま・よういち 本誌 編集長)

## 「芸術と教育」その背景にあるもの

作曲 高橋雅光

夏の暑さも落ちついてくる頃になると、絵画展やコンサート等、芸術活動も、夏の頃に忘れていた事を思い出すかのように盛んになってくる。盛んになるのは他の分野でも同じだ。食も山海の珍味が豊富になり、料理も彩りよく華やかさに舌鼓の音を添えて、人の味覚を楽しませる。また、ファッションも着るものを彩り、人を外へと送り出し、街中では花々が一斉に咲きほころびた様に、にぎやかさを増し、秋の深まりが景観を彩る季節を迎える。



私も秋の一夜、爽やかな風に誘われて、知り合いのピアノのコンサートを聴きに出かけた。演奏は割合堪能できる内容ではあったが、プログラムはベートーヴェンのソナタやショパンが中心であった。演奏会の主旨に、特別に大きな意味が有ったわけではないが、今までやってきたことの披露演奏会のような内容であった。そのプログラムの内容にふと思う事が有った。それは、こういうプログラムならばなぜ、日本人の作品を一つくらい入れないのだろうかという事であった。演奏家は自分たちの国で出来た作品を、聴衆に紹介するのも、文化的な義務ではないのかということを感じたわけである。

洋楽の演奏家の中には、日本の伝統芸能と結びつけたり、日本人の作品を一つくらい入れたりして、演奏会の趣向を新たに開拓している人もいるが、そういう人はまだごく一部で、大半の人は、西洋の古典派やロマン派の音楽等、今まで何十年となくやってきた、同じことを繰り返しているのである。

### 音楽現代

2012年11月号 定価 840円

- ♪特集1 = アニヴァーサリーな音楽家 Vol. 10  
生誕150年記念 クロード・ドビュッシー
- ♪特集2 = アニヴァーサリーな音楽家 Vol. 11  
生誕100年記念 ジョン・ケージ  
特別インタビュー アーヴィン・アルディッティ、ケージを語る
- ♪特別対談 = フルトヴェングラーの人間と音楽（その2）  
宇野功芳 × 野口剛夫
- ♪カラー口絵
  - ・ サイトウ・キネン・フェスティバル松本 2012  
「火刑台上のジャンヌ・ダルク」「兵士の物語」
  - ・ 京都府立府民ホール／アルティ芸術劇場 vol. 1  
「井上道義／オーケストラ・アンサンブル金沢」
  - ・ 藤原歌劇団公演「夢遊病の女」
- ♪インタビュー  
岸本 力、飯田みち代、大原哲夫、他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMYビル 3F

芸術現代社 TEL3861-2159

西洋人ならば、その事は自分たちの伝統的な芸術であり文化であるので、日本人のわれわれも納得が出来ようが、これからの日本の音楽文化のあり方を考えるならば、はたして、演奏家の芸術文化の捉え方はそれだけでいいのだろうか、他に展開の道が有るのではないかという疑問にぶつかる。

## 音楽教育の在り方について

現在の日本の一般的な音楽教育は、こどもの純粋な音感覚(例えば「わらべ唄」等)・生活感覚のある歌を育てることから入るのではなく、初めから西洋音楽の基本から入るような教育が行われている。

いわゆる生活文化とは切り離された、別の所にある音楽文化をこどものころから教わるのである。その結果、自国(日本の)の音楽文化について知らない、または意識を持たなく、西洋音楽を崇拜して演奏活動を続けている人が多い。

音楽大学を卒業したばかりの人に、ベートーヴェンやショパンの事について聞くと、それなりに答えられるが、では日本の伝統音楽の特徴について聞いてみると、ほとんどの人が答えられない。

留学についても、留学を志す人たちが西欧へ出ると言う事は、日本という看板を掲げていくわけであるから、外国へ出た時は日本の音楽文化の紹介くらい出来なければ、文化交流という役目も果たせないし、日本の文化意識をしっかりと持っておかないと、帰って来てからも、西洋ボケして、帰国後どのような生活や活動をしたらよいか手につかず、悩んでいる人も多い。中には西洋文化を吹聴し優越感をみせる人もいる。客観的にそういう人たちを見ていると、自己を見失っている人が多い。だからいつもベートーヴェンやショパンといった、どの演奏家も同じようなプログラムで、これでもかというくらい、毎年・毎夜似たりよつたりの演奏会が催されることになるのである。これではコンサートをただ開いているだけで、文化的に蓄積していかないではないか。

私は現在の日本の音楽家の作曲及び演奏レベルは、西欧の作曲家や演奏家と比べてみても、引けを取らないくらい高いと確信している。

しかし、日本の多くの人たちは日本人の作曲・演奏レベルの高い事実を知らないし、分かっていない。例えば、同じ日に日本の演奏家と、外国の2流・3流の演奏家が演奏会を開いて、日本の演奏家がたとえすばらしい演奏をしても、聴衆は2流・3流の外国の演奏家の方へ、多くは流れていき、大きな拍手で迎える。一般聴衆は外国の演奏家の方に「ほんもの」意識があるからである。現実的に日本の音楽家の活動が、外国の演奏家に席捲されていて、隅に追いやられているのである。

こういう現状を作っているのは、日本の音楽家自身でもあるのだ。同じような洋楽のプログラムであるのなら、聴衆は外国の演奏家の演奏を聴きに行くのが普通であろう。日本の音楽家は現実実感に対する意識が乏しすぎるし、西洋文化を畏怖し

ているのか、社会に対して問題提起をしない。こういう状況をいつまで続けて行くのだろうか。

日本の音楽文化の現状を良く知る事と、自分たちの文化意識をしっかり持つという事は、こういう事理解にも通じるのである。音楽大学では、西洋音楽や文化に関する専門的な知識は教えても、自分たちの音楽文化の在り方、日本の伝統的な音楽文化（自分たちの歴史的な音楽文化の堆積について）の流れや文化に関する特徴等を、しっかり教えていないのではないか。また、音大生の中には、音楽大学で勉強してきたクラシック音楽を実践することが、芸術活動だと思い込んでいる人が多くいる。それでは、前述した主体性のない、視野の狭い西洋音楽文化偏重とかわらない。だいたいな事は学校で学んだことを基本として、そこから何が出来るかという発想を持たなければならないが、広く世界の音楽を見てみると、多彩にいろいろな音楽が有るわけである。それだけ多くの活動のヒントが有るという事である。その中でも自己を見失わないようにするには、他の国の文化に圧倒されない、強い個性を磨くことであり、自分の国の文化意識をしっかり持つことである。

これから羽ばたく音楽家の意識の中に、それらをキチンと教えなければならないのは、日本におけるこれからの音楽文化創造の新しい展開をしてもらいたいからであり、自ら発するその主体性のある個性と、音楽大学では学ばない幅広い教養が、音楽活動を豊かなものにしていくのである。

## 日本の音楽文化の表と裏

かつて私は、戦前の日本のクラシック愛好者は6%くらいで、戦後も今も似たようなパーセンテージであるという事を聞いたことが有る。ということは音楽大学を卒業しても聴衆にもならないし、人を育てても大半は育てていないということである。しかも、夢を持って音楽大学を卒業した人でも、凡そ35歳くらいで音楽活動をやめる人が多いし、まだ活動の少ない若い人でも音楽団体に加入しようとする人は少ない。これは経済的な理由によるところが大きいし、その現実により、音楽活動をするということにも、冷めてしまっている人が多い。

それは、音楽活動をするのも、国や地方自治体の援助が出るのではなく、全て個人の負担が大きいためからである。それにも増して音楽活動を遣りにくくしているのは、先ほど述べたように、外国から稼ぎに来る音楽家や団体が多すぎるからである。日本の音楽家は貧に泣いているのに、日本は余程外国の演奏家にとって稼ぎやすいところなのだろう。

音楽文化の捉え方に西洋音楽偏重意識が有ることは、洋楽系の音楽家だけではない。外国から演奏家を呼んでいる、マネジメント業者にもそのことは言える。それは、どこの国もそうだと思うが、外国から演奏家が稼ぎに来たいから受け入れて欲しい。または呼びたいという意向ならば、相手国または相手国のマネジメント（演奏連盟）に対して、文化交流なのだから、こちらからは、何時・何人こちらの

演奏家を呼んでくれるのか。ベテランに、これからの若い演奏家も付けて交渉しても、おかしくはないのではないか。交渉は対等であって当然である。ただでさえ日本の音楽家は外国の演奏家に席捲されているのだから、それくらいの交渉事を成立させなければ文化的意義のあるマネージメントをしているとはいえないのではないか。

西欧の各国には演奏連盟のようなマネージメント（国有もある）が有り、演奏家はそれぞれランク付けがされていて、そのランクに応じて出演料が支払われている。各国のマネージメントは横のつながりもあり、規定以上は支払われない。しかし、日本のマネージメントは、西欧コンプレックスかそれらを無視して、高額な出演料を支払っている傾向が有り、日本で演奏した外国人演奏家は、日本のマネージメントから支払われた高額な出演料を盾に、自国のマネージメントにいいつけ、自分の出演料アップを計る演奏家もいて、混乱させている傾向もある。今も外国人演奏家が日本に来たがるのは稼げるからである。

## 終わりに

音楽大学を卒業した現代の大凡の若者達の音楽の捉え方は、学校で教わってきたこと（西欧の古典～近代まで）の範疇を超えない、割合保守的な傾向が有る。しかも、学校でやってきた、いわゆるクラシック音楽を演奏することが芸術活動だと思っている向きもある。西洋音楽（クラシック音楽）は優れた芸術だが、所詮は他人のものである。それを金科玉条のごとく思い、同じような曲目で毎日のように演奏活動をしている人が如何に多いか。それも明治以降定着していかないのは、前述したように、歴史的にも明らかである。一般的には演奏活動は趣味の世界と思われ、同好の人たちが、得意気になってやっているだけとみられている。

これからの音楽の道を志す若い人は、学校で教わってきたことだけにこだわらず、それを基本として、それを元に、これからどういう自分の個性を生かせる音楽を開拓（自分の音楽スタイルを作っていく）していくのか、それによって日本の音楽文化のどういうところにそれが生かせるのか。というような理念をもとに、新しい音楽活動を試みていただきたい。眼を広く見渡せば、前述したように、世界の音楽や日本の伝統芸能の中には色々な音楽が有り、そこには活動のヒントとなるようなことも一杯落ちている。

対外的に「個性」を言い表わすと、広く言えば「日本人の血を引いた・歴史的に同じ文化を共有する」と同じ意味である。つまり国際社会の中では、日本は一つの「個性」であるといえる。だから日本の歴史文化や音楽文化を大切に、慈しむ心を持ち、自分の新しい「個性」ある音楽を、自ら主体的に発して世界の聴衆に届けて欲しいのである。それが、これからの国際社会に貢献する、日本の音楽文化作りには大切なことであり必要なことである。

（たかはし・まさみつ 本会 出版局長）

## ダンサーを育てるために

現代舞踊 井上 恵美子



### — はじめに —

私の専門は現代舞踊です。英語ではモダンダンスとかコンテンポラリーダンスと訳されるジャンルです。この度、若手ダンサーを育てる極意などを書いてほしいと依頼がありました。多分、これまでに舞踊コンクールで多くの入賞者を出していることや、舞踊団活動の中で若いダンサーの活躍が目にとまるようになったせいかもしれません。文章にするのは苦手なのですが、これまでの歩みを振り返ることにより、大事なことを再認識できればと思います。

### — 指導の始まり —



指導中の風景 1 (右が筆者)

私の指導歴は芙二三枝子先生の舞踊研究所（東京・目白）から始まりました。といっても子供の振り写しや代稽古が主なのですが、新作に先生が次から次へと振付し、それを私が憶えて子供たちに教えるのです。すでに大学を卒業し、舞踊の道を考えていたとはいえ、他の研究生より遅れて師事した私にとって、エネルギーッシュな先生の一挙一動を見られることは光栄であり大きな喜びでした。発表会や公演の時期ともなると朝から夜遅くまで休みをとる暇もないほど振付と稽古は続きました。帰るタイミングを逃して稽古場に寝ていると急に先生から起こされて振付が始まることもありました。大変なよう

ですが、先生のアシスタントとしては先生の目標を知ることが私の目標でもあったので、この夜中の振付は楽しく、人間、眠くならなければいいのにと思ったくらいです。

今でも似たような場に遭遇すると時々脳裏に浮かんでくる光景です。寝ている間も考えているに違いない先生の生活を見て、指導者として大事な要素はまず強靱な体力と疲れを超える情熱を持つことだと思つづく思いました。

### — コンクールへの参加 —



その後、私は遠くに引っ越したために目白まで通えなくなり、団地集会所、自治会館、剣道場、貸しスタジオ等を借りてバレエ教室を開きました。しかし、所詮制約のある中での稽古なのでいつまでたっても成果が見えず今一つ充実感がない。時間を気にしないで思う存分稽古出来る場が欲しいと思いました。そしてついに友人が開いているスタジオを訪ねたのがきっかけで、自宅を増・改築し専用のスタジオを建ててしまったのです。スタジオが出来たころは嬉しくて生徒と一緒に元旦から稽古していたことを憶えています。

やがて熱心な生徒の中からコンクールに出てみたいという声が出始めました。私も指導者として勉強する場が欲しかったので挑戦することにしました。色々な意味で私を強くし、多くの舞踊仲間巡り合わせてくれたコンクールへの歩みが始まったのです。数年の間はたいした結果が出せませんでした。やがて参加した全員（20人近い時もあった）が入賞するという時期もあり、生徒が一位を受賞するたびに私も最優秀指導者として評価を受けるようになりました。

どのようにしてそんなに多くの優秀なダンサーを育てたのか、と良く聞かれますが、一番大事なことは踊り手の個性を良くつかむことだと思います。ある程度の技術を身につけたら、長所を見つけ、それに関する限りは他の誰よりも抜きん出てみえる振付をしてあげることだと思います。出来ないことにこだわり続けると時間を浪費するだけで、踊りまで萎縮してしまいます。思うようにいかない時、気持ちを切り替え、単純な振付にしたらとても良くなったことがありました。技術も大事ですが、感動する作品に仕上げることがまず大事なことでないでしょうか。



指導中の風景 2（後が筆者）

## — 理解と信頼 —

コンクールで良い結果を出せるようになったのは、決して私や生徒に恵まれた資質があったからではありません。家族の理解と協力のおかげでスタジオを持つことができ、練習が充分に出来るようになったおかげです。容姿や身体能力はほどほどであれば、足りない分をハングリー精神に転換させ、やる気を起こすことが出来ます。最も大事なことはその人が毎日どのような生き方をし、感性の磨かれる環境に置かれているかということです。作品を理解し、ダンサーが快く踊るために、コンクール参加希望者への第一条件にしています。

また不思議なことに、コンクールで上位に入った人達が皆身体が丈夫だったわけではありません。中には生まれながらにひどい喘息を抱えていて、酸素ボンベを常

に持参しているひともいました。稽古しているうちに自分をコントロールする必要を学び、練習量が増えるにつれて体力がついていったのです。自信がついてくると顔や身体の様子が豊かになり、見ている者を幸せな気分にしてくれます。毎日の送迎を担う家族の方にとっても、私や生徒を応援したくなる大事なキーポイントかもしれません。

こういう私自身も体力のない方なので、十分な稽古をしてあげられるか気弱になってしまうことがあります。しかし、いったん始まってしまうと「もうこんな時間？」となるまでエンドレスになることがほとんどです。飲まず食わずで、互いにふらふらになった時がやめ時なので、生徒を翻弄させることが多いのですが、その後も残って自習しているのを見ると、なんとしてでも入賞させなければという気持ちになってしまいます。どんな時も互いを信じ、本音でぶつかり合い、一度や二度の挫折があってもめげないで前に進むしかありません。

落ち込んだ後に必ず光が見えてくることを信じさせ、指導者としても大きな責任を感じる時です。

## — 踊りを楽しむ境地 —

私は踊ることが好きで、今でも舞台にも立っています。専門分野は現代舞踊ですが、これまで日本舞踊、クラシックバレエ、ジャズダンスも学び、何でも興味があります。夏祭りでは盆踊りや沿道の踊りに飛び入りしてしまうくらいです。今年の夏、北陸での公演に出かけた時のことですが、屋内会場では芸術舞踊、沿道では住民による夏祭りの踊りが繰り広げられているのを見て、どちらにも感動しました。踊る場所やジャンルに違いがあってもやりたいことを精一杯にやっている姿は生き生きしてこちらまで元気になります。

本来、踊りは楽しく、人を豊かにするものです。ですからいくら訓練をして高度な技術の踊りを披露しても、人の心に届かなければ寂しいものになってしまいます。踊る本人がまず踊りを楽しむこと、沿道の楽しみ方とは少し違うかもしれませんが、さらなる精進をしてコンクールや舞台公演でもこの境地で臨めたらどんなに幸せなことでしょう。

私は若いダンサーに時々「舞台で生活してみて！」と言います。「舞台で生きて！」とは少し違います。私でさえ舞台で生きていけるか自信ありません。演技をしようとする和不自然な表現が目立つので、舞台ということを忘れるくらい体当たりで自分を出してほしいという意味です。ダンスを心から愛し、生き生きと輝くダンサーの踊りは本当に素敵です。これからもその一人になれるよう私自身が努めながら、この幸せを分かち合える後進を育てていきたいと思っています。

## — あとがき —

最近は毎日のように若いダンサーが踊りや創作したものを見てほしいと言ってきます。見ることは好きなので苦になりませんが、違う目で見ってもらうことも必要なので、なるべく外の空気も吸うように勧めています。舞踊の道はダンサーになるだけとは限りません。また、芸術舞踊だけが人を幸せにするとも思いません。自分に必要な舞踊を見つけてそれが生きる支えになっていたら、私にとってこの上ない喜びです。



群舞の動きを指導する筆者（右）



公演写真 『火の鳥』より 2005年1月 東京芸術劇場 小ホール

(いのうえ・えみこ 井上恵美子モダンバレエスタジオ 主宰  
井上恵美子ダンスカンパニー 代表)

### 【井上恵美子 プロフィール】

1986年井上恵美子モダンバレエスタジオを設立。優れた若いダンサーの育成が評価され、東京新聞全国舞踊コンクール指導者大賞、埼玉全国舞踊コンクール橘秋子指導者賞、あきた全国舞踊祭モダンダンスコンクール最優秀指導者賞を受賞している。2005年『bright』で文化庁芸術祭優秀賞を受賞。2007年江口隆哉賞。その他、数々の受賞歴がある。また、「舞踊と電子音楽の夕べ」など、本会主催の公演にも数回参加している。

## 「実社会と教育現場の温度差・鑑賞者を育てることの重要性」

作曲 小西 徹郎



ここ近年疑問に感じる事が非常に多い。それは音楽の世界に限らずそのほかの分野においても同様に感じる事がある。何のために技術を習得するのか？その事が非常に不明瞭であると日々感じている。音楽理論を中心に作曲や演奏に磨きをかけていく、確かに基礎は重要であるしそこを抜かしていいものにはたどり着くことはできないだろう。ただ、非常に気になるのは教育の現場においてあまりにも技術や理論に偏りすぎていることである。その弊害としてメロディが書けなくなってしまうたり、出てくる音楽がつまらなかったり、音楽を作る、演奏をする根拠ですら見失っている気がしてならない。先月、学校の特別講演の際に特別講師にむけて出てきた質問は機材の設定やハード面のことなどがほとんどで講演の中で出てきた音楽の根幹に結びつく質問は皆無であった。このことは私にとってとても大きな衝撃であった。

音楽を作るその衝動とは何なのか？それは人が普段の生活の中に何を持って生きているのか？その事がとても重要である。聴く音楽も偏っては実際の作曲や演奏においても偏りは生じるであろうし、美術、アート、自然、読書、そういった音楽以外の部分が実は自身の音楽を成長させる要素が多く含まれていることを多くは頭で知りながらも実感していないと感じる。音楽も美術も「鑑賞する力」がとても重要である。「自由」を感じるための正しい認識や歴史やあり方は勉強し学ばないと「自由な感性で鑑賞する」には至らない。また、目に見える見心地のよい美や深さのない旋律による聴き心地のよい美はもちろんあるべきだがそこには審美すべきものはなかなか存在しない。やはり美と呼ばれるもの、その対極にあるものを数多く観ていくことがまずは大切だろう。その中で見る目を肥やしていくことが良い創作に結びつくのだ。

ところが、実際の現場ではどうだろう？音楽は音楽言語、美術は美術言語でしか語られていないと感じる。つまり、音楽を学んでも実際に音楽をわからない（専門知識がない）人々と仕事をする、或いは依頼をうける際にキーワードから音楽を生み出す力がないため一番重要な「クリエイション」において苦勞してしまうのだ。自分の中にどれだけの積み上げがあるのか？それが音楽に限らずアート全般、しか

もそこには単に「観てきた」ではない作品に対する自身の評価やそこから生み出された言葉や気づきがとても重要である。

## ■生き様、人生、そして鑑賞力

日々考える、何故現代クラシックやクラシック音楽は一般からみて「斜陽」ととらえられているのだろうか？そこから日常にあるものを注意深くみていった。たとえばテレビ番組でのアートの捉え方はどうだろう？「曲芸」と「芸術」もしくは「アート」は異なる。ところがテレビ出演している方々でさえその区別はつかない。「曲芸」を「芸術」または「アート」と捉えてしまうのだ。現代美術における鑑賞眼においても似たようなものを感じてしまう。作家の意識のせいなのか、「興味」の範囲から脱しない「現代美術」と呼ばれるものが巷にはあふれかえっている。「興味」の段階では作家の生き様や人生や積み上げてきたものを作品に込めることは不可能である。そして鑑賞者にも大きな問題がある。それがまさに「教育」なのである。もっと鑑賞力を身に付けるための創作や自由な創作から過去の作家や作品、その制作過程、作家の生き様にせまる教育がない限り鑑賞者は育たないだろう。入口がとても大切なのだ。そしてそのことは専門教育の課程においても非常に重要でそのことが専門性を高めていくのだ。鑑賞力を高めていくそのきっかけは「言葉」であり「感情」である。「感情」があるからこそ生き様や人生を他人のものでありながら共有することができるのだ。ここがとても足りないような気がしてならない。自分ならどういう芸術家人生を歩むのか？人生を生き様を自分自身で決めていくことができる環境を教育では作り出さなければならない。つまり、生き様も人生も積み重ねも作品も芸術もアートも音楽も社会とのかかわりも鑑賞力も視点も何もかもが実はすべて「同軸」「同地点」であるのだ。そこをまず認識し、実感しない限り何も始まらないのだ。

## ■社会、業界とのギャップ

結構前に私は音楽大学の新卒者とお酒の席でいろいろディスカッションをしたことがあった。それぞれに首席で卒業している優秀な新卒者ばかりで今後の活躍が期待されている人材たちだ。実際就職や演奏家としての活動はどうか？私は若者の進路についてとても興味深いしとても気になってしまう。何故なら皆進路決定には各人の悩みや決意をもってその時期を乗り越えてきたからである。若者と話すとき私自身も若き日のことを思い出すのだ。それに私自身も今教育の現場で音楽家やエンジニアを育てて社会に出していく役目を担っているためとても他人事だとは思えないのだ。話は戻るが、その優秀な新卒者たちと話していて、やはり今は音楽の仕事を得ることは難しいとの話をきいた。ある者は細々と教室で教えたり、またア

アルバイトをしながら更に研鑽を積んだり、またある者は就職も何もできていない、そんな話をきいた。私はいろいろ質問をしてみた。「たとえばクラシックにこだわらないのなら自身でDTM(Desktop Music の略)を駆使して音源を作り業界に売り込んでいくとか、または自分たちのアンサンブルで演奏会企画を立ち上げ、自治体や文化財団などに企画を売り込んでいくとか、そういうことは考えないの？」と質問してみたところ、DTMは学んでいないし企画書の書き方も知らない、という答えが返ってきた。

確かに音楽大学は専門学校とは異なり演奏を通じて芸術性を高める、自身の音楽を確立するための教育の場である。決して職業訓練ではない。そのことはわかるのだが、音楽業界で求められている技術やスキル、考え方を少しは反映させたカリキュラムが必要だと私は考える。せめてDTMと企画書については私は必須だと思う。何故なら音楽会社は扱う商品が音楽やアーティストであって実際には一般企業と同じく「人・モノ・金」が基盤となって経営、運営されている。だとしたら音楽家ではあってもそのシステムは理解しなければならないであろうし音楽家が経営を理解し経営に参画できることが重要だと考えている。企業の仕事はまず企画書から始まる。この企画書をもとにお金が動き、人が、モノが動いていく。音楽家が音楽だけのスキルでプロフェッショナルになれる時代はもうとっくに終わっているのだ。そしてDTMはパーソナルに自身の音楽を表現できるツールである。今ポピュラー音楽の現場では綿密な譜面は使用しない。まずはデモの音源があって、そこに各音楽家の知恵でアレンジメントされていくのが通常である。実際私の多くの現場ではトラックと呼ばれるDTMで制作した音源に自身で演奏やアレンジメントも含めた録音をしてそのデータを送り返すという仕事が9割以上である。そして今は余程予算が潤沢にあるプロジェクトでない限りスタジオ録音をすることはなく、個人のスタジオ(自宅)で制作することが殆どである。そういう現状を考えてもDTMは仕事の要であると私は現場から実感している。

## ■芸術性の理解

何故高い芸術性を身につけて最高学府を卒業したにもかかわらず、その高い芸術性が求められないのか？これは前述のとおり、一般に芸術の理解が浸透していないからである。つまり鑑賞者が少ないだけでなく鑑賞者が育っていない、このことが一番大きな問題である。そして鑑賞者の眼、審美眼を育む教育は音楽をはじめ芸術全般における専門家育成の教育現場でももっと真剣に取り組むべきである。

鑑賞者が専門家レベルの知識を単に知識としてでなく「教養」としてもっとも深く追究していくこと、そして専門家と鑑賞者が対等になれる、そのための教育が必要である。一般の中、社会全般の中で鑑賞者が育てば研鑽を積むことによって

得た高い芸術性は理解されるだけに留まらず常に必要とされるであろう。今の一般、社会において高い芸術性は「レンジ（視野）の外側」なのだ。だから鑑賞者を育てるということは各人の芸術鑑賞の「レンジ」「視野」を拡大することなのだ。そのことが急務なのである。

## ■感情と生き様と芸術と

今一番気になっていることは音楽に感情が少なくなっているという現象である。音楽を作る際も無感情のままに制作をしていたり、出てきた音楽に対して愛着をもてなかったり、また演奏においても小手先の技術だけに走り、感情表現、そのための技術ということに無関心であったりなどだ。音楽に限らず作品や表現には作者の感情とそして生き様がある。感情や生き様をもっと生々しくさらけ出して人々の心に残るものを打ち出せるようなそんな専門家、表現者のための教育が必要だと考えている。私は「具体美術協会」の考え方や作品が好きだ。特に白髪一雄氏、嶋本昭三氏の作品が好きだ。作品の意味ではなく描かれた手触りが人間そのものを感じる。あの感覚が音楽にももっとほしい。あの感覚を養うための音楽家の教育は必要だ。そして最近私は挿画（イラストレーション）の世界にも顔を出している。

前衛美術が好きな私だが挿画の世界、写実の世界、そこに生きる作家の方々との交流の中であまり好きでなかった写実の世界、挿画の世界においても優れた作品に出会うことで各作家の生き様や人生を作品からしみじみと感ずることができるようになってきた。優れた、心を打つ作品を見つける、見極める審美眼、これはすべての人に必要である。美術、絵画も彫刻も建築も詩、文芸も音楽もすべて同じなのだ。身体の外においてカテゴライズされるだけであって芸術作品が身体の中に取り込まれればひとつの感性の積み重ねになるのだ。このことをしっかりと理解し実感することがとても大切である。

（こにし・てつろう 本会理事）

---

### 読者の皆様へ

本誌では読者の皆様のご意見をお待ちしております。ご意見をお寄せになりたい方は最大1000字以内にまとめて、編集部へ郵送下さるか、下記のメールアドレス宛にお寄せ下さい。

メールの宛先（中島洋一編集長）：[yoichi\\_n@wa2.so-net.ne.jp](mailto:yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp)

## 教職課程と音楽 ～学生時代に身につけたい教養

行政書士 武田 安史



生意気盛りの高校生にとって、ふた昔もまえの田舎の男子校といえば、なんでも語り合う自由な雰囲気はまだ深く残っていました。それは生徒どうしだけでなく、生徒と教師、あるいは教師どうしのあいだにしてもそうだったように思います。そうした自由な校風の高校で青春を過ごした私は、今から思えば汗顔の至りとしか申せませんが、不躰にも音楽の先生にこのような質問をしたことがあります。「僕たちの大部分は音楽専攻ではなく一般の大学に進学することを希望しています。音楽を3年間勉強することよりもセンター試験に向けて英語や数学をもっと勉強したほうがよいのではないのでしょうか」。その先生は少しため息をついて悲しそうな顔をしながらゆっくりと落ち着いて、「大学に入ってみれば音楽の大切さがわかる日がくるよ」とおっしゃいました。私としては何気なく出た質問だったのですが、先生の表情が訴えかけるものに突き動かされ、その日のことを今でもよく覚えています。果たして私が大学へ行って音楽の重要性に気づいたといえるのかわかりませんが、大学時代に、そしてそののちにも考えたことをここにまとめておこうと思います。

私が大学で専攻したのは教育哲学でした。おそらくは音楽の教員免許をお持ちの方も、教育原理なり教育基礎学なりといった科目名で教育哲学を学ばれたことと思います。その点ではみなさんにも馴染みがあるのではないのでしょうか。卒業論文と修士論文では古代ギリシア時代の教育哲学をテーマとしました。教職用の教育哲学のテキストのなかには古代ギリシア時代が軽視されるものもみられたので、私なりの反発心もありました。それだけでなく、古代ギリシア世界は21世紀の私達から見ても2500年の時間の差を感じさせない豊かな思想の宝庫です。教育というものを突き詰めて考えるのには、まず古代ギリシアの教育論を考えてみるのが重要ではないかと思います。

人間が社会を形成し、産業が発達してくると、どの国においても教育というものに力が入られるようになる、と、20世紀初頭の古代ギリシア研究者 W. イェーガー（ドイツ人）は古代ギリシアの観察を通じて述べています。あたりまえのようなことですが、国家の形成には政治・経済と並んで教育が非常に重要な役割を果たしています。我が国においても明治維新直後、西洋の政治・経済体制を受容するための研究機関としての大学が成立したのとほぼ時を同じくして、師範学校制度が創設されました。ただし、こと音楽教育に関しては、西洋音楽を教えることのできる教師の不在から、当分の間、唱歌（音楽）の授業を実施しなくてもよいとの通達が小学



校に出され、明治の初期の時代には国内で学校における音楽教育は行われませんでした。むしろ民間での邦楽の伝統が根強く残っていた時代です。音楽という教科の特殊性から、音楽教育は（東京高等）師範学校（今の筑波大学）から分離され、音楽取調掛（のちの東京音楽学校、今の東京芸術大学）に移管されました。明治中盤からようやく足踏み式のオルガンが普及し始め、唱歌の授業も各地で実施されるようになっていきました。

その間、今の大学生にあたる年代の書生さんたちは、彼らなりの仕方西洋音楽を受容していきました。そしていつの時代にもそうですが、学生こそが音楽文化の担い手の中心であったと考えられます。明治中期から昭和戦前期にかけて大学予科（旧制高等学校）では、寮歌というものが作られ、そのいくつかは今日でも各地の大学で歌い継がれています。代表的なものに東大の「あゝ玉杯に花受けて」、京都大の「紅萌ゆる」、北海道大の「都ぞ弥生」などがあり、これらはその起源をたどるだけでも大きな研究テーマとなりますが、ともかく学生たちのあいだで自然発生的に成立した西洋音楽だといえましょう。その後時代の変遷とともにクラシック音楽を喫茶店でレコード鑑賞する文化が生まれ、戦争による中断を挟んでジャズ喫茶、歌声喫茶などといった変化を遂げていったと考えられます。

こうした学生文化の根底にあるのは、対話の精神という古代ギリシアの哲学者たちの思想の延長であろうと思います。寮歌や歌声喫茶での歌唱力は声楽家の観点からすればお粗末なものと感じられるでしょうが、その時代の学生たちの心の音楽であったのです。古代ギリシアでの教養にはテクネー（技術知）とアレテー（徳）の2種類があり、こうした学生たちの音楽はアレテーに根ざしたものだと考えられます。簡単にいえば、テクネーとは職業上の知識であり、アレテーとは社会生活を行ううえでの徳性ととらえていただければ、違いがより鮮明になると思います。我が国でも一般の大学生が法律や経済など職業上の知識を大学で学ぶのと同時に、学生歌のように仲間内でのコミュニケーションを高める力を、音楽を通じて学んでいったことには、学生の教養として重要な意義があったと思います。

いつの頃からかはわかりませんが、喫茶店を中心とした大学生の文化が衰退してきたように感じます。もちろん今でも大学生はコーヒーを飲みますが、その多くはチェーン店の喫茶店であり、かつてのように頑固な主人のいる店でレコードを聴くという文化は少なくなりました。と同時に、大学生の聴く音楽のレベルが低下していると考えられます。チェーン店で流れる心地よさそうなBGMや過度に商業化されたポップミュージックはしばしの気休めにはなりますが、それを通じて学生同士議論をしてお互いを高めるというアレテーの精神からは、いささか外れているように感じます。つまるところ、大学生からは古代ギリシアでいうアゴラ（議論の場）が失われつつあるように思います。

かつての大学生、また早熟な高校生は難解な哲学書や外国文学をこぞって読み、それを題材にして議論を戦わせたものでした。それが今日では読みやすいライトノ

ベルズに売れ行きが集中しているようです。音楽においても以前は、解らなくてもよいからクラシックを聴くことが大学生としてのプライドであり、学校の外で身につける教養だったと思います。時代が変わってインターネット社会になると、学生同士が膝を突き合わせて議論をするということがなくなり、ネット上での無責任な発言の横行がしばしばみられます。時代や技術は変化しても、学生時代に身につけておくべき教養のあり方にはいつの時代においても変化があってはならないと思います。こと教員養成という話となれば、かつてのように学外で音楽に対する知見を身につけていない者が生徒の指導にあたるということは、徳育の点で懐疑的にならざるを得ません。極端な話をすれば、高校で音楽を選択しなかった生徒は、中学3年生までしか音楽の授業を受けていないという実情があります。今日の教員免許法上で必須とされる科目はいくつかありますが、そのなかに音楽ないし芸術学は含まれていません。もちろん音楽教師が音楽を学ぶのは当然ですが、他の教科の教員にとっても、少なくとも大学の一般教養レベルでの音楽の素養は身につけておきたいものです。かつてはそれを学外で自主的にやっていたとしても、今日そのような状況に大学生がおかれていないとすれば、教員養成の観点から、大学での教職課程において音楽にももう少し光を当ててもよいのではないのでしょうか。

「幾何学を学ばざる者この門に入るべからず」とはプラトンの開いた学園・アカデメイアの門前に掲げられていたという有名な言葉ですが、プラトン自身は幾何学を学ぶ前に教養として音楽を学ぶべきであると主著『国家』のなかで述べています。

『国家』は10篇からなる作品で、岩波文庫でも2巻の大著ですが、その後半のほとんどは教育論に費やされています。そのなかでプラトンは音楽の重要性を繰り返し説いています。現在からみれば情操教育や音楽療法などは一般に知られていますが、2500年前にすでにそうした考え方の先駆けがみられたということは注目に値することです。それも単に一方通行の教育ではなく、数学にしても音楽にしても、教師と生徒の対話を通じて教えることの重要性をプラトンは説いています。音楽家としての専門的知識に至らないまでも一般教養として音楽を学ぶことの重要性は今日でもまったく変わらないと思います。それは、音楽というものがさまざまな専門分野の人達の共通の話題となって、そこに対話の精神が生まれ、人々のアゴラ（対話の広場）となるからです。

したがって、**「私は国語の教員だから音楽は知らない」**などという教員であってはならないのです。教科にかかわらず、教職課程を受講する学生はコミュニケーションの能力を高める一環として、学生時代に主要な音楽を耳にしてほしいものです。そして音楽を話題としてさまざまな人々と語り合うことで自己のアレテーを高め、そのうえではじめて生徒と接することが肝要なのではないのでしょうか。言いかえると、専門教科の指導も重要ですが、教育は知育だけでは成り立たず、徳育・体育と合わせた一体的な指導が望まれるのです。また、教員同士のコミュニケーションを円滑にするひとつの方法としても、音楽という共通の話題をもつことは教員

相互の資質を高めることに貢献するでしょう。そのためには年1回の芸術鑑賞会といった行事だけでは不十分で、普段から音楽と身近に接していることが重要であります。そうした習慣は一朝一夕にできるものではなく、学生時代にどれだけ本物の音楽ないし芸術に触れてきたかということにかかってくるように思います。

中学、高校では、授業時間数の多い英語や数学と比べ、音楽は週1、2時間の授業がほとんどだと思えます。そのわずかな時間のなかで音楽の先生方が現実にできる指導は限られているとは思いますが、単に技術的な内容だけでなく、アレテー(徳)への関与につながる何かができる、子どもたちのその後の音楽への眼差しもまた違ったものになるのではないのでしょうか。音楽の専門家でない私にとって、高校時代のもっとも記憶に残る恩師が音楽の先生であったことは、私の人生における大きな財産のように思います。

(たけだ・やすし 行政書士)

---

### 【武田安史 プロフィール】

1972年埼玉県生まれ。同県熊谷高校では音楽部に在籍。法政大学法学部を経て筑波大学第一学群人文学類哲学専攻(ギリシア哲学)を卒業。古代ギリシアの教師たち(ソフィスト)、ことにゴルギアスを中心として理想の教師論を研究。修士(教育学、筑波大学)、高等学校教員専修免許(公民)、行政書士、宅建主任者。現在、行政書士武田法務事務所代表。深谷保育園・深谷西保育園の監事を兼務。



### 今月号の特集について 編集部

今月号の特集は『芸術と教育』というタイトルで、それぞれ異なった社会的場で活動されている4人の方々に執筆をお願いしました。内容的には、芸術の専門家を育てる教育から、教養としての芸術教育まで、幅広い範囲に及んでいます。4人の方々はそれぞれの立場から、自分が積み重ねて来た実践経験から得たものを語ったり、また、自分が普段強く感じ、考えていることについて、鋭い問題提起をされていると思います。

一見、それぞれの主張が重なりあう部分が少ないようにみえますが、良く読むと、そうではなく、それぞれの執筆者が現代という時代の「芸術教育」の重要性と問題点をあぶり出しているような気がします。

読者の方々は、まず先入観に囚われず、自由に読んでいただき、その上で、共感、疑問、批判などがございましたら、読者のページに、ご投稿いただきたいと存じます。ご投稿は以下のメールアドレスをお願いします。

メールの宛先(中島洋一編集長) : yoichi\_n@wa2.so-net.ne.jp

(『音楽の世界』編集部 文責 中島洋一)

—月をめぐるて—



46万5千分の1、分母は太陽光で、分子の数値1は、月光だ。満月の光は太陽の光を月面で7%反射して、地球に届くのだという。

その月明りを光源にして撮影した写真

集を見た。石川賢治「宙（そら）の月光浴」だ。月を被写体にした美しい写真は、今までにもたくさん見てきた。しかし月の明りを光源にした写真は、あまり見ていない。

満月の光の中、目を凝らしていると、目の網膜に写りこむ世界を、レンズでフィルムにとどめたのだ。息をのむ神秘の世界。

イグアス（ブラジル・アルゼンチン）の瀑布の飛沫が虹のアーチを描いている。太陽光のもとで、描かれているだろうアーチは、月光のもとでも、その光彩の趣きを変化させながら、虹としての存在を示している。昼夜分かたず自然の営みは、休みなく展開されているのだ。あらためてそのことに気づかされる。

写真を言葉で再現するのは難しい。それが感動的な作品であれば、さらに。「百聞は一見に如（し）かず」写真集を手にとってもらえない。「満月の下、圧倒的な風景と対峙した時には、大自然への畏怖を覚えました。」と撮影者は語っている。

宇宙から眺める地球の夜は、電気の明りの洪水のようだ、とは宇宙飛行士のレポートだ。月を賞（め）で、射しこむ光を盃に受ける宴（うたげ）など、明るい夜のもとでは興味をそがれる。私の暮しの中では、とうになくなっている。

以前のことだが、電話の留守録に母の声があった。「そっちはどう？東京は晴れてきれいなお月様」そう言えば、今夜は十五夜だった。用件はそれだけ。

その時のことを地方紙のコラムに書いた。——少年の日、団子や果物、花など飾りお月見したことを思い出す。その頃の僕の季節は、折々の行事や祭りにいろどられて輪郭がはっきりしていた。地域もまわりの大人も、もう少し季節に価値を与えていたような気がする。——と。

あわてて庭に出て空を見上げた。満天の星をつき従わせるがごとくに、皓々と月が照っている。電話を返し、昔話になった。

「あの月をとってけると泣子哉（なくこかな）」小林一茶の句を教わったことなども思い出して、笑い合った。「お月様、私も久しぶり」と母は言った。父を見送って1年。やっと月など眺める気持のゆとりが出てきたのだろうか。あれから16年経った。

秋を歌う曲は数が多く、その中からの選択には、かえって悩む。子どものコンサートで歌ってみたい曲がある。「ツキ」だ。最近あまり歌われない、明治にできた文部省唱歌。1年生用の教科書だ。＜①デタデタ月が、マルイマルイ マンマルイ ボンノヨウナ月ガ ②カクレタクモニ クロイクロイ マックロイ スミノヨウナクモニ

③マタデタ月ガ マルイマルイ マンマルイ ボンノヨウナ月ガ>月が出たり隠れたり、②番と③番の歌詞をくりかえせばエンドレスの歌になる。子どもが、もうイイ！と騒ぎだすまで歌って見たら？イタズラ心がおきてくる。

こんなことを考えたのは、黒澤明監督の「まあだだよ」のDVDを見てのこと。作家内田百閒と、その教え子たちとの交流を描いた作品、黒澤の最後の監督映画だ。

ほのぼの心あたたかくなる私のお気に入りの一つ。百閒を愛読し、その人間性の面白さに魅かれて、ということももちろんだけど、なにより映画の中で、何かと酒席になるところにも味わいがある。

カラオケのない時代の話だから、酔うほどに酔うほどに、手拍子もよろしく余興の数々がとびだしてもりあがる。私も画面に入り込み、御相伴にあずかりたくなるのだ。



そこで歌われる一つが「ツキ」なのだ。大の大人が金属製のお盆で月を、背広の上着を雲に見たてた小道具まで使ったの余興となる。

歌詞を思い出しながら想像してみたい。

「出た出た月が・・・」口ずさみながら書いてくれば、「月が出た出た・・・」と、お次は「炭坑節」の出番になるのは必然。この歌、盆おどりや酒の席の定番である。目をつぶれば「ホッテ ホッテ またホッテ カツイデ カツイデ あともどり」とおどりの振りつけも調子良くでてくる。

この「炭坑節」を他でもないクラシックのコンサートで、「荒城の月」に並べて朗々と歌った歌手がいる。そんなのアリ？のこちらのとまどいを、こともなげにこえて、名曲だな！と思わずの感動。バリトンの佐藤光政氏の歌唱だった。

予期せぬことに客席もアツケにとられたが、笑い声もなく、その手の民謡だからの手拍子も起こらず、皆聞きほれてしまった。こんな風には、歌いたくても歌えないもの。ジャンルを問わずに感動させる歌唱、そのとりくむ姿勢に感銘を受けた。20数年前、長野県・小谷（おたり）でのこと。

話は思わぬ方向へ進んだ。理科年表（平成24年版）によると、11月は28日が満月。月見はもちろんだが、太陽の46万5千分の1の月光の映し出す世界にも目を凝らしてみようか。

1年に12回の満月の夜の限られた時空間に身を委ねるのも一興だ。旨い酒肴も用意せずばなるまい。

**【筆者紹介】**狭間 壮(はざま たけし)：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。





## 名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

### 〔第33回〕 カストラートは、なぜ消えた？

音楽作品を再現するのに必要な“楽器”には、当然ながら人間の声も含まれる。そしてその声には、高さの順にソプラノ、メゾ・ソプラノ、アルト（女声）、テノール、バリトン、バス（男声）の種類がある——というのは、音楽好きならまあ、誰でも知っているに違いない。実際には血液型と同じで、もっと細かな分類（コロラトゥーラ・ソプラノ、リリック・ソプラノ、ドラマティック・ソプラノ、リリック・テノール、ドラマティック・テノール、バス・バリトン。役柄込みでヘルデン（英雄的）・テノール）などもあり、歌曲や歌劇、宗教曲、合唱曲の分野では、その声質と響きが、私たちが大いに魅了してやまないわけである。

この声楽の中に、じつは“カストラート”と呼ばれる特殊な声質をもつ歌手がいたのを、ご存知であろうか。現在では姿を消したこの歌手たちの声は、最近人気を集めている“カウンター・テノール”を聴くと、少しだけ想像できるかもしれない。ヨッヘン・コワルスキーとかフラヴァ、マイケル・チャンス、アルフレット・デラーといった人たちが、要するに男性がファルセット（裏声）によって女性の声を出す、そして歌うのである。

裏声そのものは、男でも女でも出すことができる。歌の場合には、地声で苦しくなる高音域をこれに切り替えると、誰でも楽に出すことができるから、演歌歌手の中に

多用する人が多いけれど、男性がこれをするカウンター・テノールの声は、女声の場合のアルトに相当するといったらよいだろう。

では、ソプラノに相当する声を出したい時はどうするか。ここで必要とされたのが、すなわちカストラートだったのである。

そもそも女声があるのに、なぜ男性が女性の声を出さなければならないのかといえれば、初めて知る人には驚きかもしれないが、その昔、教会音楽が中心だった中世、ルネッサンス、バロック時代（1750年頃まで）には、声楽の世界は男性中心。はっきりいえば「女人禁制」なのであった。教会内では「聖歌隊」というのが重要な役割を果たしていたが、聖書中にある“女性は、教会で黙すべし”に従い、すべて男声で構成されていたのである。

ところが男声だけであると、困るのは高音域を担当する声である。アルト・パートはファルセット歌手が歌うとしても、それだけではひどく低い感じの聖歌になってしまう。そのために高音域ソプラノ・パートには、変声期前の少年（ボーイ・ソプラノ）が起用されたのだった。

しかし少年たちは、当然なことに変声期（10代半ば以後）を迎えると、声が変わってしまう。入れ替えれば簡単だが、人材不足もあったのだろう。彼らの声を変らせずそのまま保持させる方法として、ここに「去勢」（睪丸をとってしまう）というのが考

え出され、実行されるようになった。手術をすると、少年の声は保たれ、肉体は成長して大人並みの力強い声を出すことができるわけで、これがいわゆるカストラートであった。1600年頃のこと、最初のカストラートは、ジローラモ・ロジーニという人だと伝えられている。

カストラートは、教会内ばかりでなく、その頃生まれたオペラ（フィレンツェ。ペリの「ダフネ」、カッチーニとの共作による「エウリディーチェ」など）へも進出して、一大ブームを起す。3オクターヴ半も声を出せたというファリネッリのような歌手が現れた結果、希望者が続出。年間4000人の少年が手術を受けたとか。18世紀のイタリアでは、歌手の8割がカストラートで占められたといった話。競争も激しく、舞台登場に際しては、各人がいろいろな趣向を凝らした——など、興味深い話があるといわれている。

こうしたカストラートの時代は、約200年ほど続いたが、衰退し始めたのは、やはり教会から。声のためだけに残酷な手術を施すことに、ローマ教皇庁が禁止令を出したからである。と同時に、1796年、イタリアへ進攻したナポレオンが「気持わるい」

「身の毛がよだつ」「男として不名誉なこと」として、禁止したことも拍車をかけた。



アレッサンドロ・モレスキー

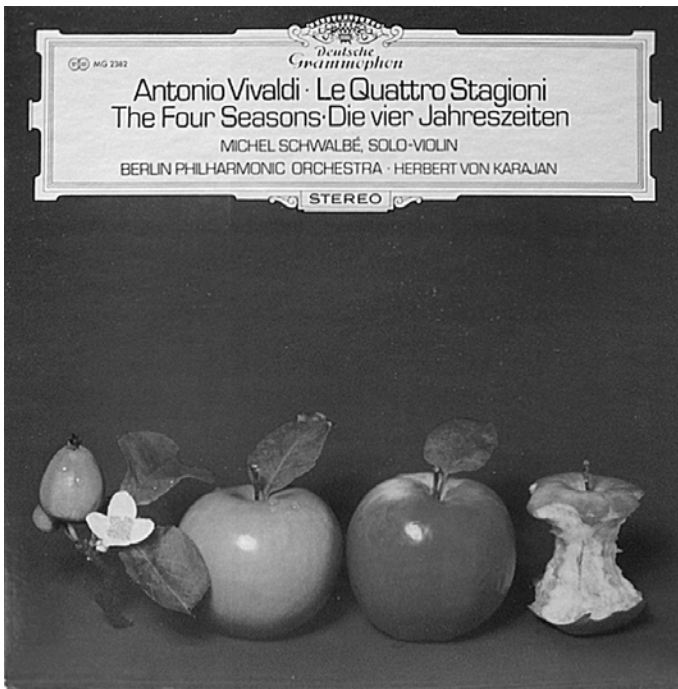
かくしてモーツァルトの「ポントの王ミトリダーテ」「アルバのアスカニオ」などの作品を最後に、カストラート歌手たちはひっそりと引退したり、教会へ戻ったりして、いつの間にか姿を消した。最後の一人といわれるアレッサンドロ・モレスキー（1858～1922）の声は録音にも残っているが、貧弱な音のせいかな昔日の面影はほとんど浮かんで来ない。

**【宮本英世氏プロフィール】**1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



## ミシェル・シュヴァルベ追悼

2012年10月9日、往年のベルリン・フィルの名コンサートマスター、ミシェル・シュヴァルベ（1919～2012）が亡くなった。カラヤン時代のベルリン・フィルの象徴的な存在で、実際カラヤン自身が1957年に、スイス・ロマンダ管弦楽団のコンサートマスターだったシュヴァルベを引き抜いたのだった。



私がシュヴァルベの名前を知ったのは、小学4年生のとき。生まれて初めて買ったヴィヴァルディの《四季》のLPがカラヤン指揮のもので、その中でソロを務めていたのがシュヴァルベだった。豪華な折り返しジャケットの中の解説書にシュヴァルベの写真も掲載されていた。演奏もいかにもカラヤンらしいソフトな合奏の響きと、レガートな旋律線をもったものだった。その中でシュヴァルベの輝きのある音、引き締まったリズム、しなや

かなフレージングは子供心にも印象に残った。

カラヤンはレコードによって自らをプロモーションするとともに、クラシック音楽の大衆化、民主化を目指した指揮者だった。その結果、多くのファンを獲得した半面、マスコミから「金儲けの名人」と批判され、チェリビダッケから「コカコーラ」と揶揄されるなどアンチも多かった。カラヤンの共演者たちも色眼鏡で見られることが多く、今までヴァイオリニストとしてのシュヴァルベも過小評価される嫌いがあった。

実際、日本の音楽界はシュヴァルベから大きな恩恵を受けている。浦川宜也、海野義雄、徳永二男、安永徹、数住岸子など多くの日本人奏者が師事している。ポーランド出身でユダヤ人のシュヴァルベが教えを受けたのはパリ音楽院の名教授ジュール・ブーシュリと、ルーマニアの大作曲家ジョルジュ・エネスコであり、その「フランコ＝ベルギー派」の音楽伝統が日本の奏者たちに受け継がれた訳である。シュ



ヴァルベのソロ録音は数少ないが、1枚1枚接してゆくことで、その偉大な業績を振り返ることができると思う。

●ヴィヴァルディ：ヴァイオリン協奏曲集《四季》(写真 前ページ)

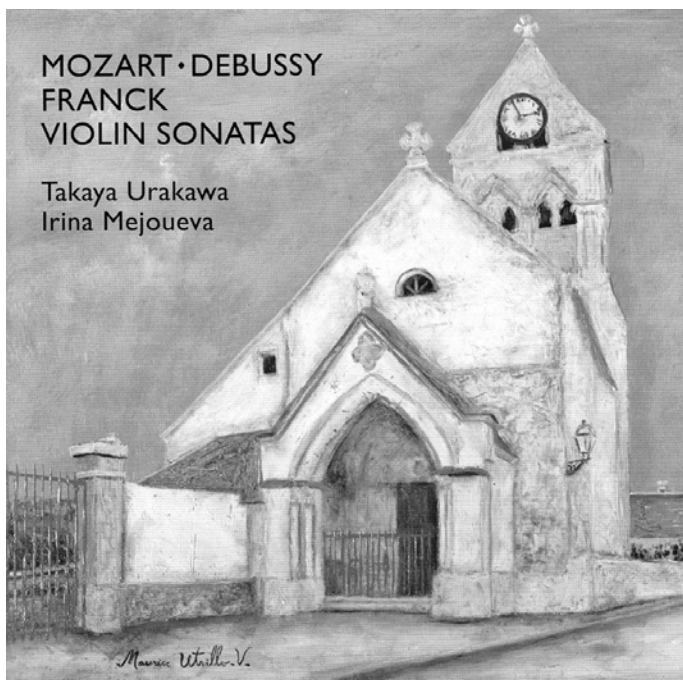
ミシェル・シュヴァルベ (ヴァイオリン)

カラヤン指揮ベルリン・フィル

[グラモフォン MG2382 (LP 廃盤) ]

1972年、スイス・サンモリッツでの録音。カラヤンが初めて《四季》を録音したことで、当時話題を呼んだレコード。カラヤン・ファンからは喜ばれ、バロック音楽ファンからは「ムード音楽」と揶揄されたりした。リングで春夏秋冬を表した洒落たデザインは、カラヤンお気に入りのデザイナー、オルガー・マチス (1940～ ) によるもの。

現行 CD → UCCG4517



●モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ K. 301 ●ドビュッシー：同 ●フランク：同 (写真 左)

浦川宜也 (ヴァイオリン)

イリーナ・メジューエワ (ピアノ)

[若林工房 WAKA4166 (CD) 0]

2012年6月、富山県魚津市、新川文化ホールでの録音。フランコ=ベルギー派の巨匠イザイに捧げられた名作、フランクのソナタは浦川宜也 (1940～ ) にとって実に3度目の録音。シュヴァルベから受け継いだフランコ=ベルギー派の伝統を、より良い形で残す執念のようなものを感じさせる。奇しくもシュヴァルベが亡くなった直後、10月15日に発売された。ジャケットはユトリロ「ドゥーユ村の教会」。解説は筆者が担当している。

.....

**【板倉重雄氏プロフィール】** 1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年 HMV ジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」(コロムビア)のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」(アルファベータ)を上梓。



# 私と、ラジオ・ドラマ

連載第5回

作曲 助川 敏弥

この連載の第3回で、映画音楽録音専門の指揮者Yさんのことを書いた。話がまたもやラジオ・ドラマから脱線するが、このYさんのことをどうしても書いておきたい。

実名は、吉澤博さんである。すでに亡くなられたが、人柄、人格、実に立派な人であった。私はこの雑誌の前号に、松村禎三君の本について紹介と書評めいたことを書いた。彼の遺稿集である。この中で松村君は吉澤さんについて書いていた。松村本人が書いているのだからここで書いてもよかろう。松村君は若い時代、経済的に困窮した時、吉澤さんから借財をしていたそうだ。こころよく協力してくれた吉澤さんに松村は深く感謝している。そして、松村はのちに全額を返済したそうだ。この時も、「また必要な時はいつでも」と吉澤さんは言ってくれたと書いていた。吉澤さんはそういう人だった。温厚にして真の紳士、そして温かく親切な人だった。何よりも仕事の腕が見事である。吉澤さんが指揮してくれるとすべて安心である。作品が扱いにくい時も作曲者に不満めいたことを一切もらすことはなかった。こういう人が表舞台ではない影の大事な所で、かけがいのない仕事をして日本の映画をささえていたのである。私も、若い頃の、馴れない出来のわるい仕事をどれだけ支えて頂いたか知れない。感謝とご冥福を心からお祈りする。

さて、本題に戻るが、録音の仕事で大事なカゲの作業は「写譜」という仕事である。何人かのアンサンブルで演奏するわけだから、一人ずつパート譜が必要である。何よりも、曲の仕上りは時間的に余裕充分というわけにはいかない。これが現実で普通である。夜6時頃からの録音に作曲が出来てくるのが午後というようなことは普通、こんなのはいい方で、さらに遅くなることがある。極限状態では、録音スタジオの片隅に場所を借りて現場で同時進行という場合もある。私も自責の念にたえないが、こういう、自慢にならない、追い詰められた仕事をしたことがあった。

写譜された楽譜は間違いがあつてはならない、間違いがあればそれだけ演奏が停滞する。そして、コピーがない時代は、複数の同じパートを作らねばならない、絃楽は複数でひくからである。これは「プルト増し」と呼んでいた。いまは、コンピュータ・ソフトで楽譜が作成でき、パート譜もスコアから刷り出せる。いま写譜屋

さんの仕事はどうなっているのだろう。作曲者本人がパート譜も刷り出せて、それを自分でコピーすれば必要な複数用意できる。このコピー機の登場は写譜屋さん活躍の時代でも大きな能率化をもたらした。この時は、写譜屋さん本人がコピー器を購入して、パート譜を複数化する。そして料金は手書きと同じ請求する。これは利口なやり方だった。手が省けて収益は同じだからである。

演奏会用の楽譜でも、このパート譜の出来は重大である。黛敏郎さんの「涅槃」交響曲の初演の時、指揮者の岩城宏之は、出来上がったパート譜を黛さんに渡して、自宅で全部目を通してくるように要求していた。大編成曲の場合、パート譜が不正確であると、その直しと確認のために練習の一回分がつぶれてしまうのである。プロのオーケストラでは新曲でも練習は四回。「午前+午後」が二日である。その一回分が楽譜なおしのために音を出さずにいたらず消費されてしまう。これは外国でも同じで、矢代秋雄さんの話では、メシアンの新曲練習を見学した時、パート譜のなおしと確認で一回目の練習が終ってしまったそうだ。

それでも、演奏会作品の写譜は時間の余裕を持ちながらの仕事である。放送映画の仕事ではすべてが時間との競争である。この仕事場で無理のシワ寄せが最後に来るのが写譜屋さんである。こういう立場の人に迷惑をかけることは道義上はなほだよくない。よくないことを承知の上で、迷惑をかけることに私はひどい自己嫌悪におそわれた。写譜屋さんは、仕事の状況により仲間を動員して人数を増やすし、間に合わないから録音スタジオまで来てくれといわれれば、これも断われない。私は年期が入ることにより仕上げが速くなり、迷惑をかけることは次第になくなった。熟練してからは録音前日にスコアを届けることもあるようになった。私はもともと生来きちょうめんな性質である。不本意な迷惑の加害者役を演じた当時の思い出はいまでも悪夢のようである。

写譜屋さんは人数を動員すれば収益も分割になるが、報酬総額としては場合によればかなりの額になることもある。安い作曲料より高くなることもあるだろう。長い交響曲程度のものになると作曲料と同じか以上になることもあるかもしれない。当時といまとは貨幣価値が違うからなかなかわかりにくいだが、コンピュータ印字の時代になり、この職業もいまはどうなっているのだろうか。

(すけがわ・としゃ 本会 代表理事)

# —ザルツブルク国際夏期講習会—

ピアノ 草野 明子

## 講習会概要

毎夏7月から8月にかけて6週間にわたるザルツブルク講習会は数多くある講習会の中でも最も歴史がありまた規模もヨーロッパで最大のものである。1916年に歌手のリリー・レーマンが夏にモーツアルテウムの一室で個人的なレッスンをしたのが始まりと言われ、1925年にヴァイオリンのクラスが加わり1929年ピアノ、作曲、指揮、オペラのクラスが加わり徐々に拡大し現在のような形態になった。最初は夏の音楽講習会と呼ばれていたがパウムガルトナーが学長となった1947年以降「国際夏期講習会モーツアルテウム」という名称になる。学長もパウムガルトナーから9人目のミュレンバッハ氏が勤めている。歴代の教授陣にはヒンデミット、ベリオ、



モーツアルテウム旧校舎

フルトヴェングラー、カラヤン、シミオナート、シュヴァルツコップ、ニコライエーヴァ、ペルルミュテール、メニューヒン、シュナイダーハン等歴史に名を残した音楽家達がこの講習会に関わってきた。

この講習会の魅力はザルツブルクの街のもつ複数の要素、それは取り巻く自然、モーツアルトの生まれた街、そして音楽祭等音楽を志す若者にとり一度は訪れたい聖地でもあろう。

## 現在の講習会の実情

1976年に筆者は初めてこの講習会に参加したが、旧校舎と呼ばれる建物のみで行われ翌年から新校舎が加わり規模も一段と大きくなった。また期間も3週間から2週間に短縮されその代わりより多くのクラスが開講されていく。2012年はピアノのクラスだけで20人の講師が2週間ずつの期間に配分されている。

初日に各クラスオーディションが行われ各自、自分の得意とするレパートリーから弾く。そのパターンが殆どだが先生により課題曲を前もって告知する事もある。受講生となるか聴講生となるかの判断や何人受講生を採るかなどは各講師に任される。

2週間の間4～5回くらいのレッスン（曲目は4,5曲時代の異なる作品を用意することが望ましい）、クラスコンサート、またクラスから優秀な生徒が選抜されるアカデミーコンサートや郊外の城などで行われる演奏会に推薦されるなど演奏の場がかなり用意されていることも学生にとり有難いことだと思う。

（アカデミーコンサート会場写真）また、講師陣は様々な国際コンクールの審査員を務めている事も多くコンクールの参加者は顔見世の場として利用しているのも最近の傾向である。

2012年の受講料は610ユーロ（約6万円）、これに練習用のピアノを借りる約100

ユーロ（約1万円）が経費としてかかるがこの新校舎になってからは練習室にレッスン室を開放してくれとても良い状態のスタインウェイ、ベーゼンドルファーピアノを借りる事ができる。練習も朝8時から夜10時までで他の講習会より断然優れていると思われるのはこの設備と環境だろう。また受講料の中にはすべてのクラスを聴講できるオプションもあり講師陣はドイツ系、ロシア系、フランス系、

アメリカなど多様な人材で、また様々な国籍の学生の演奏に接する事は最大の刺激となる。学生寮の設備も多く滞在費も抑える事が可能で、そこで各国の学生達との交流、情報交換など活発に行われている。音楽祭でのオペラなどのゲネプロのチケットが講習生に配布されたり、安い券をモーツアルテウムで購入する事もできるなどのメリットも多い。また学長がそれぞれの任期の間に講習会の独自性を打ち出すように最近はなってきた。現在の学長は作曲が専門でもう既に7,8年はその任にあるが彼は毎年イベントを企画しピアノに関して2010年はショパンコンクール、昨年は現代音楽コンクール、今年はドビュッシーコンクールを開催。またシフやエマールなどの現役ピアニストの公開講座を開くなどその実行力は凄い。



モーツアルテウム新校舎



アカデミーコンサート会場（旧校舎）

## 音楽事情の縮図

しかし今年度はヨーロッパの金融不安を反映してか通常大勢のイタリア人を含むヨーロッパの参加者が今年は殆どいなく、アジア人特に中国、韓国、そして日本からの参加者ばかりというクラスも見受けた。今年に限った事ではなく世界のピアノ事情の縮図のようにも思える。多くの世界の音楽大学では今やピアノを学ぶ学生の大半がアジア人でジュリアード音楽院では第一公用語が韓国語だと言われ、またカーティス音楽院はラン・ラン、ユジャ・ワンなどのピアノのスーパースターを生み出した事で大勢の中国人が次は自分の番だと待ち構えるように在籍していると言う。

アメリカでクラシック音楽を極めようとしているアメリカ人は絶滅危惧種と笑い話になるほどである。最近の国際コンクールなどもロシア人が強い個性を持って優秀な成績を残し、彼らもまた以前のようにロシアのみで勉強するのではなくドイツ、カナダ、イギリス、フランスなど国外にどんどん出て勉強を続けチャンスを窺っている。ロシア人の演奏スタイルが以前に比べ極めて個性豊かになっていることも東西の壁の崩壊以降こうして自由に世界を行き来できる環境と無縁ではないと思う。実際ヨーロッパでは日本より先にクラシックを学ぶ子供が減り、弾く側より聴く側にまわったと言われて久しい。ザルツブルクでもその参加者の国籍を見れば現在の縮図を見る思いである。



ペルティカローリ先生レッスン  
通訳中の筆者（左）

私自身ウィーン留学中初めてこの講習会に参加した時、オーディションも厳格でまた言語能力も問われたが、学外で違う仲間と共有した時間はかけがえもない良い経験であり積極的にレッスン中に自分から意見を発信していくという方法を肌で感じる事ができ、それからの修行に先生とのコミュニケーションは不可欠となった。特にウィーンの音大卒業寸前に受講したペルティカローリ先生との出会いは自分の音楽人生の分岐点となった。それはイタリア楽派との出会いであり日頃奏法に試行錯誤していた自分にパッと

光が差し込むようなアドバイスを頂いた。その瞬間は鮮明に覚えている。それがきっかけとなり卒業後イタリアに移住し現在に至るまで自分の最後の師と慕うことになる。1978年よりザルツブルクの講習会で教えられ私も受講生として、また通訳として常に若い学生の演奏に接する事ができるのは幸せな事である。私が留学していた頃夏休みは長く、多くの友人達はザルツブルクなどの講習会に武者修行に出かける事が多かったが最近の留学生は夏になると日本に帰国する人が多いように思う



2012年10月7日 王子ホール

音楽評論 萩谷 由喜子

なぜか聴く機会のなかった広瀬美紀子のリサイタルに初めて足を運び、ピアノという楽器からこれほど多面多彩な表情を生き生きと紡ぎ出すピアニストを知らなかったことを悔いた。なにしろ、音が充実している。彼女はとても生命力に満ちたひとで、人生をポジティブに歩み、もちろん辛いことや苦しいこともあるに違いないが、その山、川、谷を、ピアノを弾くことによって、ピアノの音に思いを託すことによって乗り切ってきたひとではないかとそんな印象を受けた。それほど彼女のピアノは表情ゆたかで精彩に富み、たとえ繊細な曲を奏でたときでさえも、どこか逞しさを宿していた。

あらためて、プログラムに記載されたプロフィールをみる。東京藝術大学音楽学部と同大学院ピアノ科修了。師として、村上明美、笠間春子、谷康子、井口秋子、M. ムンツ、J. ドラノワ、M. ファビュスの諸氏の名がある。1981年のデビュー以来、ソロ、室内楽、伴奏の各分野でコンスタントな活動を続け、東響と協奏曲も共演。八王子音楽院院長として後進も育て、自宅サロンコンサートは25回以上に及ぶという。この絶大なエネルギーが音の張りとなってあらわれている。

さて、この日の最初のプログラムはベートーヴェン。あの「ハイリゲンシュタットの遺書」の年1802年に書かれたソナタ第17番「テンペスト」である。第1楽章冒頭のくるくると交代するテンポの処理は自然体で、作曲者の作為も演奏者の作為も感じさせることなく、続くドラマの世界への期待感を高める。2度目のアレグロの畳み掛けるような前進力も小気味がよく、躊躇いをみせず突き進む。これと非常に対照的に聴こえながら、進撃中のオアシスとしてみごとな表裏一体感をなして奏されたのが、再現部に入ったところのつぶやくようなレチタティーヴォ。ここにおのずと滲んだ詠嘆、あるいは慨嘆、あるいは回顧の情の深さはきわめて印象的であった。第2楽章のアダージョは淡々とした中に晴朗な気分を湛えながらも、先を急がず地に足をつけてじっくりと奏された。低音部に暗示的にうごめき、ときおり高音部にも顔をのぞかせる「運命の動機」も強調されすぎることはない。すべてがあるがままに進んでいった。そしてフィナーレでは単一の動機の反復のうちに情熱と不安な情緒がほどよく交錯した。総じて、3つの楽章の役どころが明確に位置づけられて、構成感のしっかりした演奏であった。

続いて、師のチェルニーを介してベートーヴェンの孫弟子にあたるリストがとりあげられ、「巡礼年報第2年」から「ペトラルカのソネット第104番」、および「巡礼年報第3年」から「エステ荘の噴水」が演奏された。音に輝きがあり、音と音の連なりは立体的だ。技術もたしかで、詩情もたっぷりと醸し、少なくともこの2曲を聴いた限りでは、リストにも向いているピアニストであることがわかった。

休憩を挟んだ後半は、助川敏弥への委嘱作品「夏のうた」から幕があがった。2つの2分音符弱奏から始まり、規則正しい音型の続くシンプルな序奏は音の純度が





## ～ ローマ法王御前演奏記念 報告会&amp;コンサート ～

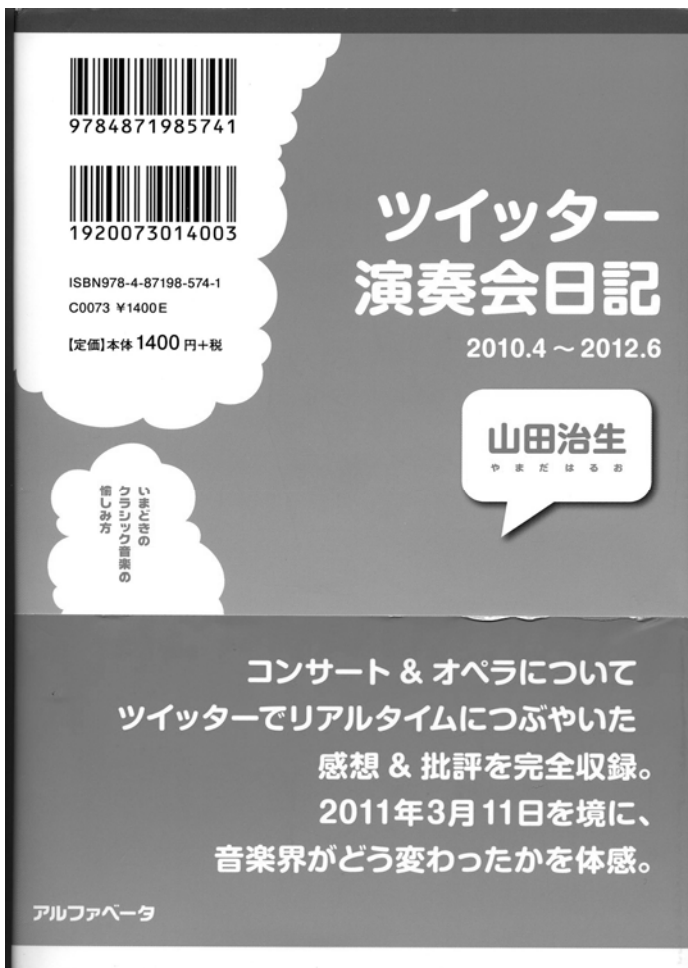
17年前遭遇した交通事故が原因で脳脊髄液減少症という難病を患い、10年間演奏生活から遠ざかっていたピアニストの松下佳代子が、ステージに帰ってきた。彼女の復帰を祝って開かれたこの日の催は、前半がローマ法王の前での御前演奏のビデオ放映、と次に「絶望からの復帰」というタイトルで、彼女を治療した脳神経外科医の高木清博士の話、友人達の証言があり、話の間に、同じ病気から回復した若い作曲家 AK 氏のピアノ独奏曲が松下によって演奏された。

後半のプログラムは松下佳代子のリサイタルで、シューマン『子供の情景』全曲、ショパン「バラード」第1番ト短調、助川敏弥「山水図」、高田三郎「子守歌」が、松下のスピーチを挟んで演奏された。いずれの曲も、病気を患う以前に何度も演奏し、慣れ親しんだ作品である。特に『子供の情景』は、シューマンの研究家でもあり、デュッセルドルフ市の計らいで、夫君でチェリストのトーマス・ベックマンとともに、シューマンとクララが暮らした最後の家に居住していた彼女にとって、もっとも思い出の深い作品であろう。彼女は病気回復の途上ということで、立ち続けることは難しいらしく、椅子に座りながら語るが多かったが、彼女の話し方は、明るく生き生きとしており、病の重苦しさは感じられなかった。

そして、彼女の演奏からは、音楽をすることの喜びが溢れ出てくるように感じた。自在に変化するテンポ、訴えかけるようなゆっくりとした終止、音をやさしく愛撫するような柔らかな PP。「音楽ってこんなに繊細で、ダイナミックで感情豊かなものだったのね」と、再会した音楽の精と喜々として語りあっているように思えた。もちろん、久しぶりの演奏と言うことで部分的に小さな破綻はあった。しかし、全体的にみて長い期間の病気療養を経ても、音楽的に失ったものは殆ど無かったのではなかろうか。むしろ、音楽をすることの喜びを改めて強く噛みしめることが出来たことで、彼女の音楽はより深まって行くのではなかろうか。アンコールで演奏した助川敏弥作曲「ちいさき いのちの ために」は、彼女にとって初めて演奏する曲であろうが、しっとり心染みこむ演奏だった。少し残念だったのは、調律が不十分なためか、ピアノが時折キンキンと響くことだった。

病から奇跡的に蘇った松下が、今後さらに良い音楽を奏でてくれることを切望してやまない。

(中島 洋一 記)



この本は、自分なりの音楽の楽しみ方を見つけ出そうとする人たちにとって、「目から鱗が落ちる」本である。この本の左半分は『ツイッター演奏日記』で、横書きで左から読むようになっているが、著者は殆ど毎日のように様々な種類のコンサートに足繁く通っており、氏の音楽美食家としての健啖ぶりには感心する。右半分を占める縦書きの「いまどきのクラシック音楽の楽しみ方」は、「クラシック音楽の楽しみ」「ホールで愉しむ」「メディアで愉しむ」「さまざまなクラシック音楽を愉しむ」の4つの章から構成されている。

この本はまず「音楽がわかる」ということはどういうことなのか？という問いかけから始まっている。長らく音大で教え、音大生は一般人に比べ読譜力などでは長じているが、はたして音大生の多くがどれほど音楽を深くわかっているのか疑問を抱いていた

私には、納得出来る説明だった。今日、クラシック音楽とそれ以外の音楽との境界線が曖昧になって来ている現象、クラシック音楽が非西洋圏（特にアジア）に広まることで質的な変化が起こって来ていることについても、むしろ柔軟かつ肯定的に捉えている。拍手のマナーについても、時代とともに変わって来ていることに触れ、音楽の楽しみ方が時とともに変化して行くと語っている。

この本は、「自分流の音楽の楽しみ方を見つけ出したい」と願っている音楽ファンにとって、実に親切なガイドとなっている。各種コンサートの学生券について、ホールの託児所についてなど、よく調べないとわからないことが多く、参考になるし、第3章では、音楽配信サイトについての判りやすい説明もある。しかし、著者がもっと熱っぽく語っているのは、オペラ、ミュージカルについてである。

この10年ほどの間にCDが廃れ、代わってネットを通した音楽配信が勢力を増して来ているが、オーディオで音楽に接し始めることが多かった我が国の音楽愛好者にとっては、メディアの主役が代わっただけで、音楽の聴き方に大きな変化はもたらさないであろう。むしろ、音楽会が社交の場でもあり、長い休憩時間にコーヒーを飲みながら語り合うヨーロッパの人々の間に、ネット配信された音楽を一人で愉



# 《明日の歌を》— 楽友邂逅点 ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

第六回 今井重幸 舞踊に魅せられた作曲家が育てた、異色の舞踊家列伝(6)

情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

六回目は、作曲家「今井重幸」として、現代舞台芸術の企画演出者「まんじ敏幸」として、長く舞台・舞踊・演劇界に関わってこられた今井重幸氏に、対談形式でお話を伺いたと思います。

## ■今井 重幸/まんじ敏幸

(作曲家、指揮者、舞台芸術企画・演出者)

1933年生まれ。1945年より独学で作曲を初め、交響詩「狂人の幻影」が縁となり、伊福部昭に入門。のち米国でエドガー・ヴァレーズに師事。1953年NHKテレビの開局にともない、影絵・人形劇の制作スタッフとして参加し、「蜘蛛の糸」「杜子春」「走れメロス」などの教養番組音楽を作曲。映画では前田憲二監督、亀井文夫監督、手塚陽監督らの音楽を担当。舞台では東京芸術座、ソシエテ・デザール、青俳、文学座、人間座、薔薇座、アルス・ノーヴァなどの劇団に劇音楽を作曲。

また、まんじ敏幸の名で舞台演出家としても活動し、1956年、舞台に関連する若い芸術家たちとともに「現代舞台芸術協会」を設立、企画と演出を担当。

ヨネヤマ・ママコ(ダンス・マイム)、土方巽(舞踏—今井は土方の芸名の命名者であり、「舞踏」のジャンル名も今井による)、三条万里子(モダンダンス)、小松原庸子(スペイン舞踊)、長嶺ヤス子(フラメンコ舞踊)らを世に送り出す。

現代舞台芸術協会理事長、日本フラメンコ協会理事、東京造形大学造形学部・舞台芸術専攻元講師、日本大学生産工学部・建築工学科元講師。



(写真：小島竜生)



## ■橘川 琢(作曲家・日本音楽舞踊会議理事)

作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。第60回記念「文化庁芸術祭」参加。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。

## ■ 演劇活動と今井重幸

(今井) 「(文字通りセピア色の一枚の写真を見ながら)真ん中に座っているのは寺山修司(1933-1983)、その左隣が僕、天本英世(映画俳優・1926-2003)、右端が三条万理子(モダンダンサー・1933-)・前田憲二(映画監督・1935-)・山谷初男(俳優・1933-)・・・」

(橘川) ————何ともすごい集合写真ですね・・・。

「これは劇団『アルス・ノーヴァ(1964)』発足のとき。一年間もの準備期間が終わり、いよいよ旗揚げを表明したときの集合写真。カフカの『Der Prozess(審判)』の日本初演

をやる前に、前衛的な演劇活動をしようと。ラテン語でアルス（芸術）ノーヴァ（新しい）と命名した。」



後列役者たち

左から2番目：山谷初男、

後列一番右：前田憲二（後の映画監督）

最前列スタッフ：

左から天本英世／今井重幸／寺山修司（中央）

最前列一番右：三条万理子（モダンダンサー）

「とにかく世界の新しい時代の息吹を、演劇の新しい波を紹介したい。その上で日本の新たな創作演劇を、というのがイデーだった。

新しい、いままでなかったものを。そのために、戯曲も自分たちのために新しく用意したいと。」

## ■ 交差する人々・・・そして演出家、まんじ敏幸の誕生

——それにしてもまさに多士済々・・・こうして集まった方々のその時の状況は、どのようなものだったのでしょうか？

「シナリオライターの寺山は、当時放送の仕事で売れていた。でも、かねてから色々な劇団で戯曲を書いてみたいといっていたので、今度旗揚げするから書いてみないか、座付き作者としてやらないかと声をかけた。何しろアルス・ノーヴァは、新しい戯曲を欲していた。そして彼にとっても新たな創作劇をやることは、放送界に新風を吹き込みたかったからだろう。

野沢那智（声優・1938-2010）は声優として特に売っていたけれど、舞台に立つ機会が欲しいという事で、『審判』の主演として彼を呼んだ。思えばその頃の役者の中ではアルバイトで声優をやっていた人たちが多かった。しかし舞台に対する野沢那智の情熱は本物で、その後、彼がつくった『劇団薔薇座（1963）』で、彼は100人を超えるキャストで、一大ミュージカルスペクタクルを作り上げたりした。

天本（英世）君とは、彼はスペインものが得意でスペインマニアだった。その関係でよく僕の所に遊びにきていた。三条万理子とも親しかった。天本君は東宝との専属だったから映画は無理だけど、舞台になら客演で立てるんじゃないかという話になり、呼んだ。

三条万理子は、先日のインタビューで話した通り、モダンダンスの世界で活躍していた。前田憲二は、『人間座』の役者だったけれど、そこを飛び出してアルス・ノーヴァの役者集めに尽力し、その後は役者をやめて、映画監督に転身した。」

——多彩な人生が交差していますね。ところで、この旗揚げ公演、今井先生の芸名「まんじ敏幸」が演出として初めて出てきますね。この芸名を作った理由と、その名前の由来は・・・？

「劇団アルス・ノーヴァは僕が主宰者、企画・演出家だったけれど、『今井さんは作曲家で知られているから、作曲家が演出というのはちょっと抵抗が・・・』と劇団員が言い出して。

『まんじ』は、単純に、僕が東洋的な指向も強かった。もともと Svastica 『梵語』で大乘仏教、パーリ語、仏教用語から来ている。まんじというのは、末広がりの意味。字（卍）を見てわかる通りある一点から、拡大してゆく。劇団が発展する事を願ってつけたんだね。本日、ここから始まるけれど、いい発展をしてゆく事を願って。『敏』は、少年時代に詩人の上田敏（1874-1916）が好きだったから、そこから。『幸』は、本名の最後の一文字だね。」

## ■「アルス・ノーヴァ」始動と発展、解散。「薔薇座」「天井桟敷」の誕生

「アルス・ノーヴァは、カフカの『審判』（アンドレ・ジードが戯曲化）を第一作目として発表した。その『審判』の後に第二作目としてイヨネスコ『授業』。どちらも日本初演。三作目はテネシー・ウィリアムズの『ロング・グッドバイ』（二作目と同時上演）。その後四作目に寺山修司の新作をやろうとしたときに、その肝心の寺山の台本が間に合わなくて。（笑）」

——寺山さんは、その頃相当忙しかったのでしょうか。

「彼は放送の仕事をしていて、そこでの仕事が沢山あったようだね。とにかく寺山が間に合わないという事で、そこで順番としては寺山新作の次にやる予定だったジャン・ジュネの『黒人達』を繰り上げてやろうとしたけれど、残念ながら一週間分の劇場費を半分納めていたものが戻ってこなくなってしまう。売った切符は払い戻し。一回公演がつぶれてしまうと劇団は致命的打撃だよ。成り立たなくなってしまうからね・・・。キャンセル料が膨大になってしまっ。

寺山修司の台本が間に合わなくて、結局大きなマイナスを背負ってしまい、続けるのが困難になって、こうやっていたんじゃ続けられないという事で、思い切って解散を。」

——そうでしたか・・・。その後、集まった皆様はどうされたのでしょうか？

「劇団アルス・ノーヴァの解散が決まったとき、野沢那智があとを継ぎたいという事になって。メンバーの多くは彼の『劇団薔薇座』に引き継いだ。その後薔薇座は大きく発展・展開し、ミュージカル劇団に迄飛躍して行った。

そして寺山も、座付き作者としてやりたかったアルス・ノーヴァが無くなってしまったから自分自身で自前の劇団を作った。それが『天井桟敷（1967）』。だから結果としては、アルス・ノーヴァの発想を引き継ぐ形で、『薔薇座』が成長・発展し、『天井桟敷』が生まれた形なのかなあ。」



## 審判 DER PROZESS

2部5景

フランツ・カフカ／原作  
アンドレ・ジード／翻案  
安堂信也／訳

まんじ	敏幸	演	出
高田	一郎	装	置
立木	定彦	照	明
今井	重幸	音	楽
深川	定次	効	果
小林	泰彦	宣伝美術	
小林	泰彦	学	舞台監督
大坂	剛	制	作
松原	剛		

「審判」日本初演の写真とスタッフ  
写真手前：野沢那智

# 職場 山崎

きょうは新劇の演出家今井重幸さん(右)に登場してもらった。長い頭髪を「リボン」聖徳太子そっくりだ。真夜中が大好き、日が暮れると生き生きしてゆく。

## 新劇演出家

舞台のまん中の大きな白い死刑台。トランペットが不安なテーマをくりかえし、観客は不思議な世界に引き込まれていく。「なせ断せられなければならないんだ」と絶叫しながら処刑される主人公。再び不安なトランペット一帯(カフカ)審判「日仏会館ホール」。ギッシリ詰った客席からは熱っぽいため息がもれる。初日の幕があいたとき、演出家の仕事は終る。たった一週間のための長い長い準備—それが演出家の仕事だ。最後列で腕を組みするどき目で舞台に見入る今井さん。東

# 生きる

引っぱる出す」といのが今井さんの主義だが、口でいうほど楽じゃない。二年以上本演もやらず、音楽、演技、舞踊、演劇理論、演劇—地道な訓練をしてやるとそれが生きるようになった。

## 真夜中に生き生きと 初日までの長い準備

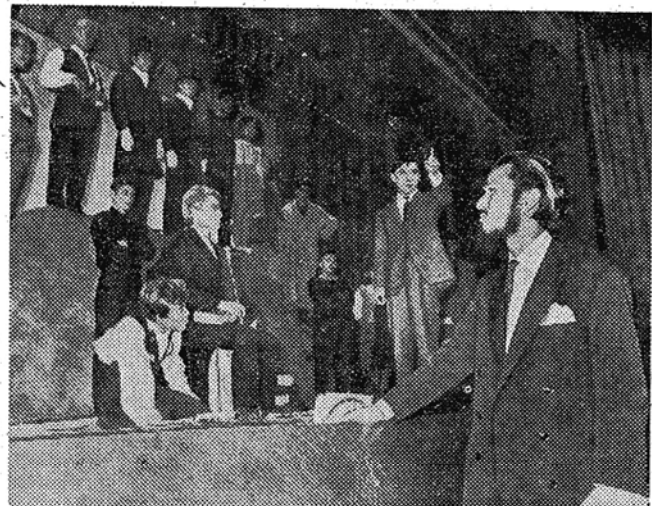
舞台のための作曲もする。初日が近づくと睡眠時間は三時間から三時間。「細かならぬまわしをあれこれいわす、役者に好き勝手にやらせよ、こころいかに

言だった父親に、むかし風にきびしく育てられた。ところが、不肖、のせがれは詩、音楽、絵が大好き。国語、漢文は大きらい。中学にはいると無断で

楽、照明、演技が一体となる総合的な創造「つまり新しい演劇」だった。東京音楽学校(芸大の前身)作曲科に入学したのも演出家になるための勉強の一つと

谷駅のすぐそばに小さな「けいこ場兼事務所」を建てて演出活動を始めた。

おとしの正月、このけいこ場を根拠地として劇団「アルス・ノーバ」が結成された。アルス・ノーバは新しい芸術という意味のラテン語。集ったのは「型にはまったままの演劇にあきらまない」と、これまたそれぞれの劇団から飛出してきた十六人の若者たちだ。今井さんの月給は五千元。劇団の手算にはちゃんと計上されている。ところが実際は、パレエの演出や作曲のアルバイトをして得た金を劇団に注ぎこむほつがすつと多い。欲得すくでは全くわりの合わない商売だ。団員たちも同じだ。テレビの吹きか



劇団の演出をする今井重幸さん(右端)＝お茶の水・日仏会館ホールで

アノの先生に通いはじめ、著々思つてのことだ。十二音音楽に興味をもつて、前衛的作品を盛んにつくった。おかげでかじ風の教授にいらまれて、二年、三年でこも飛出した。八年前、同じ理想の若者たちと

え、肉体労働、さまざまなアルバイトをしながらもみんな「本職は演劇人」と胸をはる。「新劇だけで食べていけない」まよになれたら、というのが今井さんや劇団の人たちの夢だ。

朝日新聞 昭和38年12月10日付 「東京に生きる」より

### ■劇伴、舞台の音楽を創る

——ところで純粋に音楽だけを勉強してきた人が、いきなり劇伴や舞台の音楽に進むケースがあるかと思ひます。視覚的なものと音楽を組み合わせる時、劇伴や舞台音楽のアイデアはすぐに出るものなのでしょうか？



「舞台には舞台の構成があり、劇伴には劇伴の発想がある。だから、純粹に音楽だけをやってきた人が、いざ台本がきたからハイ書きますよとはいかない。やはり自分から勉強し多くの事を蓄積しないと駄目。そうじゃないと、発想が低俗になる。」

——先生の場合、勉強や蓄積は子どものころから沢山観ていた芝居からも？

「そうだね。まあ舞踊や芝居を観まくっていたというだけでなく、映画、特にヨーロッパ映画を良く見ていた。少年の頃だから生の舞台を見る事は実際には少ないけれど、映画だったら簡単に一人で行けたから。そこでこういうときにこういう音楽が付いて、こういう効果があるということが気になってきた。いい映画や舞踊・演劇舞台の中、ストーリーとの関係。こんなに感動するのは何だろう、なぜなのだろうと子ども心に感じていた。どこに良さや効果があるのかなと考えていたら、音楽だったり。」

——子ども心にも、音楽も感動の大きな要因だと感じたわけですか。ストーリーの上でも、その場面上でも。

「ええ。特に映画は参考になった。ストーリー、演出、演技、映画、舞台、そして音楽……。さらにこういうトータルでひとつの芸術表現ということに魅力を感じて、その後学生の僕は『ソシエテ・デザール（演劇研究会）』で全体の演出の勉強に進んだことでもあるし、劇団は『人間座』の演出部にも籍を置いていたけれど、前半は劇音楽を書いていた。また、他の劇団（文学座、青俳、東京芸術座等）多くの劇団の劇伴を担当するようにもなった。

自分がTVの劇音楽や映画音楽をやりはじめて、映像に音楽をつけるようになった時は、実際、監督とずいぶんやりあったね。この人物は明るい顔をしているけれど、裏に悲しみを背負っている！とか。こういう場合は裏にあるものを、見極めて音楽をつけないとかね……。」

——なるほど。ところで映画の中で、これはお勧めという作品はありますか？

「そうだね、僕の好みだけれど、何かに付ける伴奏音楽としては、フランス映画、イタリア映画、ドイツ映画……戦前の後半、戦中、戦後初期のがいいかな。外国映画は洒落ているし、音楽も重要視されている。向こうの監督は特に音楽の効果・効力を大切にしていたし、映画音楽は勉強になったね。戦後、日本でも伊福部（昭）や早坂（文雄）がいいねえ、となつて。」

それにしても……総合芸術としての映画『Les enfants du Paradis（1945年）（邦題：天井桟敷の人々（1952年））』なんて、フランスがドイツに占領されている時の制作だった。芸術家精神に、気骨があった。占領下でも決して迎合せずに……！

映画そのものも良かったけど、芸術に身を置く者として、こういう心意気は何よりすばらしいことだと、僕は思う。」

（インタビュー 於：2012年8月19日 今井重幸邸にて）

※ お知らせ：次回《明日の歌を》-楽友邂逅点-は、2013年1月号予定です。



先月10月11日に福島市のライブハウス“C-moon”にて世界で大活躍されているロックバンド”BOWWOW”の山本恭司氏の特別講演と「弾き語り・弾きまくりギター三昧ライブ」が行われた。企画制作は学校内プロダクションのWasabi Music Entertainment.だ。(以下Wasabi)

Wasabiの学生、江田昇が山本恭司氏に依頼をして実現となった。Wasabiのメンバーは2年生の熊倉莉瑛、同じく2年生の江田昇、そして1年生の佐藤美風の三名。佐藤美風には最近では私のアート活動のマネジメントや制作も請け負ってもらっている。それぞれに悩みや様々なことを背負いながらの今回の企画制作、とてもよくがんばっていたと私は思う。



講演中の山本恭司氏と筆者(右)

講演当日、会場に山本恭司氏が到着しWasabiメンバーで出迎えて楽器と機材の搬入とセッティング。講演を受講する学生たちはセッティングからサウンドチェック、リハーサルまでを見学することができる。もちろんこれは通常はありえないことである。特別講演ならではのことである。そして山本恭司氏による講話が始まった。単にギターテクニックではなく、音楽としての「感情表現」この感情表現に必要な技術と心のあり方な

どとても大切なお話に私自身もとても多くのことを学ぶことができた。実際にギターを演奏されながら同じ音階でも感情の込め方によって演奏の仕方も変わる、そのための技術を伝授くださった。「音符では表現できない世界」これこそが音楽の重要な要素であるのだと。そして「音楽は自由であるべき」ということ、固定観念にとらわれない、表現のすべては人を物語る、その言葉の中に込められた意図はとても明確にずっと心に届いた。擬音表現の中に音楽の可能性を示唆するメッセージもこめられていて受講した学生たちは真剣な眼差しで食い入るように耳を傾けていた。

この講演の始まりから終わりまでの間に私にとってとてもうれしい瞬間がたくさんあった。セッティングの際に学生の江田が山本恭司氏からギターを手渡された場面があった。ギターを委ねられるということは演奏家はその者を信頼しているということなのだ。心の信頼があるからこそ世界に1本しかないギターを学生の江田に委ねた。このことがとてもうれしかった。そして講演の最後にまだドラムを始めて1年しか経っていない江田が山本恭司氏にセッションを申し込み、快く引き受けて

くださったことだ。もちろん、本番ではなく講演、授業の一環としてのセッションである。私はベースを弾きながら山本恭司氏と江田の演奏している図をみながらとても幸せな気持ちになった。そしてセッション終了後「反省会」としてとてもありがたいアドバイスとお言葉をいただいたことは江田にとってかけがえのない財産となったことだろう。また、今回体調不良であったにもかかわらず笑顔で司会進行してくれた佐藤、そして全体を把握し気丈に制作指揮をしていた熊倉、そして物販やモグリを手伝ってくれた熱心な学生たち、彼らの姿がとてもうれしかった。音楽を通じて社会にかかわっていく経験と体験、このことは福島の若き学生たちにとってかけがえのない財産である。他の学生たちもぜひWasabiを目指してがんばってほしいと願う。

講演が終わり、「弾き語り・弾きまくりギター三昧」ライブが始まった。前半はアコースティックギターでの演奏、後半はエレクトリックギターによる山本恭司氏のソロ公演である。機材を使いこなした卓越した秀逸な技術と感情のこもった音色で一人で何人分もの音を出し、美しく、そして壮大な音楽世界が広がる。そして山本恭司氏の心あたたまる歌声も体感できるのだ。福島市での公演が初めてだということで福島のファンの方々は大きい素敵な音楽をしみこませ、大いに盛り上がっていた。お客様の中には南相馬市からお越しの方もいらっしゃった。仙台まで出てそこから新幹線に乗り福島市にいられたという。原発事故の影響で最短でくることができないのだ。私はお客様ともお話をしながらお客様からも山本恭司氏のお人柄と心の優しさを感じた。ファンの方々は皆素敵でいい方ばかりだ。今まで出会ったファンの方々は皆素敵な人たちだ。私は思う、山本恭司氏の「音楽で人をハッピーにする」この気持ちがきつとこんなにも素敵なファンの方々を引き寄せているのだと。そしてお客様は音楽を通じて心を共有しているのだと私は感じた。誠に素晴らしいことである。学生のみならず私自身もとても大きな学びと気づきがあった山本恭司氏特別講演・「弾き語り・弾きまくりギター三昧」ライブ、この大切な時間を企画してくれたWasabiの江田昇、熊倉莉瑛、佐藤美風にありがとうと言いたい。そして福島までお越しいただきとても大切なことを伝えてくださった山本恭司氏に心から感謝の気持ちでいっぱいである。



講演中の山本恭司氏

(こにし・てつろう 作曲会員)

写真提供：Wasabi Music Entertainment.

# 若い翼によるCMDJコンサート 5

～ CMDJ Concert 5 for young musicians ～

2012年11月18日（日）16:00 開演

すみだトリフォニー 小ホール

主催：日本音楽舞踊会議 / 後援：月刊『音楽の世界』

## 《 ごあいさつ 》

本日はご来場いただきまして、ありがとうございます。  
本年は日本音楽舞踊会議が1962年に創立してから  
50周年の記念の年であり、本会主催の「若い翼による  
CMDJコンサート」も5回を迎える事となりました。  
将来有望な、また、もうすでに活躍をされている若い音  
楽家達の演奏を広く知って頂く事が本公演の目的ですが  
年ごとにレベルが上がってきているのは喜ばしい事であ  
ります。今年は記念の年なので、本会の代表理事である  
深沢亮子氏がピアノ連弾で特別出演し、このコンサート  
に華をそえて下さいます。今後とも皆様のご支援をよろ  
しくお願いいたします。

日本音楽舞踊会議 代表理事 助川敏弥、深沢亮子  
理事長 戸引小夜子  
公演局長 北條直彦  
コンサート実行委員長 戸引小夜子



## Programm

司会 佐藤 光政

- ◆ 宮木 孝枝 (ソプラノ) 中野 友裕 (ピアノ)  
中田 喜直 : むこうむこう (三井ふたばこ作詞)  
G. ドニゼッティ : 「リタ」より “この清潔で愛らしい宿よ”
  
- ◆ 芹沢 妙子 (ソプラノ) 山木 千絵 (ピアノ)  
W. A. モーツァルト : 静けさは微笑みつつ K. 152 (210a)  
私は行きます、でも何処へ? K. 583
  
- ◆ 上埜 マユミ (ピアノ)  
F. リスト : ハンガリー狂詩曲 第2番 嬰ハ短調
  
- ◆ 浅井 隆宏 (ピアノ)  
C. ドビュッシー : 前奏曲集 第1集より 5. アナカプリの丘 10. 沈める寺  
前奏曲集 第2集より 12. 花火
  
- ◆ 齋藤 亜里紗 (ソプラノ) 中野 友裕 (ピアノ)  
M. A. チェスティ : いとしい人の回りに  
L. アルディーティ : くちづけ
  
- ◆ 杉田 聖子 (ソプラノ) 山木 千絵 (ピアノ)  
J. S. バッハ : あなたがそばに居たら BWV. 508  
W. A. モーツァルト : あなたは忠実な心をお持ちです K. 217
  
- ◆ 塩川 翔子 (ヴァイオリン) 宮崎 若菜 (ピアノ)  
M. ラヴェル : ツィガーヌ (演奏会用狂詩曲)

日本音楽舞踊会議創立 50 周年記念特別演奏

- ◆ 深沢 亮子 / 栗栖 麻衣子 ピアノ連弾 (primo 深沢 secondo 栗栖)  
G. フォーレ : 組曲「ドリー」OP. 56  
1. 子守歌 2. ミ・ア・ウ 3. ドリーの庭  
4. キティ・ワルツ 5. やさしさ 6. スペイン風の踊り

## 《曲目解説・演奏者プロフィール》

### 1. 宮木 孝枝 (ソプラノ) 中野 友裕 (ピアノ)

中田 喜直 : むこうむこう

Yoshinao Nakata : mukou mukou

G. ドニゼッティ : オペラ「リタ」より“この清潔で愛らしい宿よ”

Gaetano Donizetti : “E lindo e civettin”

「むこうむこう」中田喜直(1923-2000)作曲。この曲は、“むこう”という言葉の抑揚をごく自然に屈託なく旋律の中に解き放った明るく親しみやすい小品歌曲で、1964年にテノール用として作曲された。作風は、明るく、メロディーの動きも魅了的で洒落た感覚が印象に残る。

「この清潔で愛らしい宿よ」G. ドニゼッティ(1797-1848)作曲。舞台はイタリアのベルガモの とある宿屋。旦那が失踪し、未亡人となったリタはその後、再婚し気の弱い旦那を奴隷のように扱って、気ままな生活。しかし、突然前の旦那が宿へやって来る。あろうことか、リタを押し付けあって、勝負する旦那同士……。結局リタは、今の旦那と元鞘。本日歌う曲は、リタが幕開けにうたう歌。「私は世界で一番幸せな若女将、うちの旦那はダメ男。いつもわたしの言いなり。結婚するならダメ男が一番よ」と高らかに歌います。



【宮木孝枝 (ソプラノ) Takae MIYAKI】都立芸術高校音楽科卒業、フェリス女学院大学音楽学部卒業。卒業記念演奏会に出演、国際フォーラムにて、ミュージカル「赤毛のアン」出演。小宮順子・蔵田雅之・山下美樹各氏に師事。Ki の会会員。

【中野友裕 (ピアノ) Tomohiro NAKANO】東京芸術大学卒業。ピアノを大瀧郁彦、日比谷友妃子、迫昭嘉、ガブリエル・タッキーノ、大野眞嗣の各氏に師事。

第16回かながわ音楽コンクール中学校

の部で最優秀賞、横浜市長賞を受賞。トップコンサートにて神奈川フィルハーモニー管弦楽団と共演。2001年PTNAピアノコンペティションF級全国決勝大会出場。大学在学中から室内楽の演奏活動にも力を入れている。横浜音楽協会、横浜市民広間演奏会会員。



### 2. 芹沢 妙子 (ソプラノ) 山木 千絵 (ピアノ)

W. A. モーツァルト : 静けさは微笑みつつ K. 152(210a)

私は行きます、でも何処へ? K. 583

Wolfgang Amadeus Mozart : Ridente la carma , Vado, ma dove?

「静けさは微笑みつつ」ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが作曲した歌曲。作者不明のイタリア語の詩によるカンツォネッタ(小さい歌)で、作曲された時期・場所・

動機などすべての事情がわからない。ラルゲット、へ長調、4分の3拍子で、ダ・カーポ形式をとり、中間部はハ長調に転じている。

「私は行きます、でも何処へ？」このアリアは、ロレンツォ・ダ・ポンテの台本、マルティン・イ・ソレル作曲のオペラ「気むずかし屋でも根は善良」の第2幕第5場の挿入曲として作曲された。夫ジョコンダの破産に直面したルチッラ夫人が歌うもので、4分の4拍子、アレグロで始まり、激しい調子で進むが、後半は4分の3拍子のアンダンテ・ソステヌートになり、沈痛な気持を静かに歌っている。



【 芹沢 妙子 (ソプラノ) Taeko SERIZAWA 】 静岡県立清水南高等学校芸術科 音楽専攻卒業。フェリス女学院大学音楽学部声楽学科卒業。これまでに平松英子、山下美樹の各氏に師事。Ki の会会員。



【 山木 千絵 (ピアノ) Chie YAMAKI 】 国立音楽大学音楽学部器楽学科卒業。おもにアンサンブルピアニストとして活動中。飯田和子、戸引小夜子、山下美樹の各氏に師事。

### 3. 上埜 マユミ (ピアノ)

#### F. リスト : ハンガリー狂詩曲 第2番

Ferenc Liszt : Hungarian Rhapsody No.2

リストは民族的血筋はドイツ系であり、最後までハンガリー語を身につけることは出来なかったが、終生ハンガリーを自分の祖国として愛していた。そのようなリストにはハンガリーを題材にした作品が多い。今回演奏する「ハンガリー狂詩曲」はリストがハンガリーのジプシー舞踊曲を元にして書いた曲である。ジプシー舞曲では、テンポのゆっくりした「Lassan (ラッサン)」とテンポの速い「Friska (フリスカ)」という二つの表現を使っている。この第2番の狂詩曲は「トムとジェリー」、「ロジャー・ラビット」など多くの映画に使われている名曲である。

【 上埜マユミ (ピアノ) Mayumi UENO 】 北海道出身。北星学園女子高等学校音楽科卒業。国立音楽大学音楽学部 演奏学科鍵盤楽器専修ピアノコース卒業。国立音楽大学北海道同調会演奏会に2008、2009年出演。ヤマハ音楽教室発表会にゲスト出演。国立ショパンアカデミー学院・サマーセミナーにてディプロマ取得。これまでに渡辺卓、浜尾夕美、戸引小夜子、エフゲニ・ザラフィアンツ各氏に師事。



#### 4. 浅井 隆宏 (ピアノ)

C. ドビュッシー : 前奏曲 第一集より 5. アナカプリの丘 10. 沈める寺  
前奏曲 第二集より 12. 花火

Claude. Debussy : Preludes 1er. livre 5. Les collines d'Anacapri 10. La cathedrale  
engloutie  
2e. livre 12. Feux d'artifice

ドビュッシーの“印象主義”と呼ばれる作風をピアノ音楽上に確立した最初の作品は『版画』だったが、さらにそれを発展させて完成の域にまで達したのが、この2集からなる前奏曲集ということができる。そのため、いずれの曲もドビュッシーの特有の個性が発揮された名曲揃いとなっている。第1集の12曲は1909年から10年にかけて作曲されている。各曲のタイトルは、固定観念に縛られないようにとドビュッシーの配慮から、各曲の終わりの余白に小さく書込まれた。

5. アナカプリの丘 “Les collines d' Anacapri” ドビュッシーが南イタリアのナポリ地方を旅行したときの思い出がインスピレーションになっていると言われている。どこまでも明るい空と海が表現されている。民謡のような親しみやすいメロディーに溢れていて、前奏曲第1巻の中で、一番人気の高い作品とも言える。

10. 沈める寺 “La cathedrale engloutie” ブルターニュに伝わったケルト族の伝説が基になっていると言われている。それは、海に吞まれてしまったカテドラルが海の上に浮かび上がって来るというもので、海に鐘の音が静かに響くところに始まり、カテドラルが堂々と登場する場面では力強い高揚を伴って表現されている。

12. 花火 / “Feux d' artifice” お祭りでの様々な花火の鮮やかな色彩が技巧的に描かれる。花火のおしまいには、フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」が遠くから聞こえ、7月14日のパリ祭を表現しているのかも知れない。この曲集の最後を締めくくるのに相応しい鮮烈な曲。

【 浅井 隆宏 (ピアノ) Takahiro ASAI 】

第12回彩の国埼玉ピアノコンクール銀賞受賞。埼玉県立大宮光陵高校音楽科を経て、2009年、桐朋学園音楽部門より奨学金を得て、桐朋学園音楽学部に入學。現在同大学4年在学中。これまでに、金谷峰子、北川暁子、弓削田優子、有森直樹の各氏に師事。





## 5. 齋藤 亜里紗 (ソプラノ) 中野 友裕 (ピアノ)

### M. A. チェスティ : 「いとしい人の回りに」

Pietro Marc'Antonio Cesti : Intorno all'idol mio

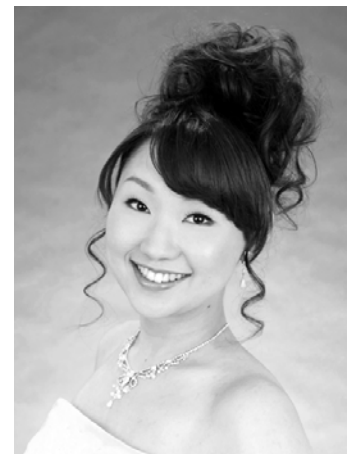
### L. アルディーティ : 「くちづけ」

Luigi Arditi : Il bacio

「いとしい人の回りに」M.A.Cestiによるオペラ『オロンテア』（1656年）の Aria です。エジプトの女王オロンテアが保護を求めてやってきた画家のアリドーロに身分違いの恋をして歌います。最終的にはアリドーロがフェニキアの行方不明だった王子だったことが分かり、二人は結ばれることができます。イタリア古典歌曲 Aria として多くの人に歌われてきた、そよ風のように優しい曲です。

「くちづけ」L.Arditi 作曲のイタリア歌曲です。Arditi は、指揮者、作曲家として活躍し、歌劇や歌曲を多数発表していますが、現在歌われるものとしては、この「Il bacio」が有名です。恋人への愛しい想いをストレートで濃厚に伝える、とても明るいワルツです。結婚式などのお祝いの席でも歌われ、とても華やかさがあります。

【 齋藤 亜里紗 (ソプラノ) Arisa SAITO 】フェリス女学院大学音楽学部声楽学科卒業。同大学ディプロマコース修了。大学在学中に学内選抜による「オーケストラ協演の夕べ」に出演。これまでに、平松英子、山下美樹の各氏に師事。ki の会会員。



【 中野友裕 (ピアノ) Tomohiro NAKANO 】3 頁前参照

---

## 6. 杉田 聖子 (ソプラノ) 山木 千絵 (ピアノ)

### J. S. バッハ : 「あなたがそばに居たら」

Johann Sebastian Bach : Bist du bei mir BWV. 508

### W. A. モーツァルト : 「あなたは忠実な心をお持ちです」

Wolfgang Amadeus Mozart : “Voi avete un cor fedele” K.217

“Bist du bei mir BWV.508” は J.S.バッハが、声楽家の妻アンナ・マグダレーナに贈った音楽帖に収められている Aria。この音楽帖には歌曲や器楽作品など、バッハやその息子たち、それ以外の作曲家による愛すべき小品が並んでおり、バッハの家庭的な側面を知ることができる。40 曲余りが収められたこの曲集は、バッハ家の子供達の音楽教材であり、日常の楽しみとして親しんでいた音楽を集めたものであった。この Aria はバッハの作品

と伝えられているが、原曲は G.H.シュテルツェルのオペラ「ディオメデス、または、罪なき勝利」に含まれている。

“Voi avete un cor fedele K.217” は、1775 年に作曲されたソプラノと管弦楽のためのアリア。ザルツブルク興行のある劇団のために作られた、ゴルドーニの台本によるガルツピ (B. Galuppi, 1706-85) のオペラ・ブッフア「ドリーナの結婚 Le nozze di Dorinda」第 1 幕第 4 場で、ヒロインのドリーナが 求婚者をあしらう歌。男を手玉に取ってしまいそうな 愛らしくも強い女性の心が歌われているが、それは後のモーツァルトのオペラに登場するあしらい上手の侍女役を先取りにしたかのようである。



【 杉田聖子 (ソプラノ) Seiko SUGITA 】神奈川県立小田原城内高校、フェリス女学院大学音楽学部声楽学科卒業。幼少の頃より小田原少年少女合唱隊に所属し研鑽を積む。これまでに桑原妙子、朝倉蒼生、齊藤京子、山下美樹の各氏に師事。現在、ki の会 に所属。私立高校非常勤講師。

【 山木 千絵 (ピアノ) Chie YAMAKI 】2 頁前参照

## 7. 塩川 翔子 (ヴァイオリン) 宮崎 若菜 (ピアノ)

### ラヴェル：「ツィガーヌ・演奏会用狂詩曲」

Maurice Ravel : Tzigane (Rapsodie de concert)

モーリス・ラヴェル(1875-1937) フランス語でジプシー(ロマ)の意をもつ《ツィガーヌ》は、ハンガリー出身の女性ヴァイオリニスト、イエリ・ダラーニに献呈された。ラヴェルは彼女にハンガリーの民俗音楽を弾いてもらうなどして多大の感化を受け、作品のアイデアを膨らませていったという。曲はハンガリーの民俗的な伝統音楽を踏まえた 2 部構成をとり、全体に主題の展開が骨組みとなっている。ヴァイオリンの長大な独奏で始まる第 1 部は、チャールダーシュの形式区分でいうラッサン、ピアノを交えた経過句に続く第 2 部はフリスカに相当する。



【 塩川 翔子 (ヴァイオリン) Shoko SHIOKAWA 】5 歳よりピアノ、6 歳よりヴァイオリンを始める。兵庫県立西宮高等学校音楽科卒業後、2008 年桐朋学園大学入学。第 10 回日本クラシック音楽コンクール優秀賞受賞。全日本学生音楽コンクール大阪大会入選。第 15・16・17 回同コンクール高校の部全国大会入選。第 6 回関西弦楽コンクール優秀賞受賞。同受賞者コンサート出演。2012 年 3 月、ブルガリアにてブルガリア国立ソフィアフィルとソリストとして共演し好評を博す。2012 年 3 月桐朋学園大学卒業。これまでにヴァイオリンを石井いずみ、稲垣美奈子、山岡耕祐、清水高師、漆原啓子、加藤知子各氏に師事。

【宮崎 若菜（ピアノ） Wakana MIYAZAKI】

1989年長崎県生まれ。3歳よりピアノを始める。第39回長崎県新人演奏会優秀賞。第3回東京ピアノコンクール大学生の部第3位。これまでに、ピアノを三村則子、多美智子、多紗於里、吉村真代、鶴園紫磯子の各氏に師事。2012年桐朋学園大学音楽学部を卒業し、現在同大学研究科に在籍中。



8. 創立50周年記念特別演奏

深沢 亮子 / 栗栖 麻衣子 ピアノ連弾 (primo 深沢 secondo 栗栖)

G. フォーレ : 組曲「ドリー」 Op. 56

Gabriel Fauré : Dolly Op.56

1) 子守歌

1) Berceuse

2) ミ・ア・ウ

2) Mi-a-ou

3) ドリーの庭

3) La Jardin de Dolly

4) キティ・ワルツ

4) Kitty valse

5) やさしさ

5) Tendresse

6) スペイン風の踊り

6) La Pas espagnol

タイトルの「ドリー」とは、ガブリエル・フォーレが妻のマリーを通じて親しくしていたエンマ・バルダック（後年のドビュッシュー夫人）の娘、エレーヌの愛称で、エレーヌの誕生日を祝うために1893年からほぼ毎年1曲ずつ書かれ、献呈された。初演は1898年、アルフレッド・コルトーとエドゥアルト・リスラーの連弾による。

第1曲 Berceuse ホ長調 Allegretto moderato 1893年作曲。ゆりかごのようなアルペジオの上に優しい主題が歌われる。

第2曲 mi - a - ou へ長調 Allegro vivo 1894年にエレーヌの2歳を祝い作曲された。まだよく舌のまわらぬエレーヌが兄のラウルを「メッシュュー・アウル (Messieu Aoul!)」と呼ぶ愛らしさを、フォーレはそのままタイトルにしたが、出版社の勘違いであったか、猫の鳴き声を示すこの名前に変わってしまったとされる。

第3曲 Le jardin de Dolly ホ長調 Andantino 1895年作曲。フォーレ特有の和声の豊かさが表れている。自作ヴァイオリンソナタ第1番から最終楽章の主題が引用されている。

第4曲 Kitty valse 変ホ長調 Tempo di valse 1896年作曲。フォーレが元々与えたタイトルは「ケティ・ヴァルス (Ketty valse)」。ケティとはラウルの飼い犬だそうで、この曲も出版の際に名前が変わってしまったものとみられる。第2曲のリズミカルさと対照的な穏やかで流れるようなワルツ。

第5曲 Tendresse 変二長調 Andante 1896年作曲。瞑想的な主題とその再現がカノンを含む中間部を挟んでいる。

第6曲 La pas espagnol ヘ長調 Allegro 1897年作曲。生き活きとした華麗な終曲。

エレヌの母親のエンマは、後にドビュッシー夫人となり、ドビュッシーはその子供シューシューのために「子供の領分」を書いている。つまり「ドリー」と「子供の領分」は文字通り姉妹作品といえる。



【 深沢亮子（ピアノ） Ryoko FUKASAWA 】15歳で日本音楽コンクール首位受賞。ウィーン国立音楽大学を首席卒業。1961年ジュネーブ国際音楽コンクールで首位。以来、ウィーン楽友協会黄金の間を初め数多くのリサイタル、放送、オーケストラとの協演を始め、日本、ヨーロッパ、南米、アジアの諸国で精力的に演奏活動を展開。国際音楽コンクール、日本音楽コンクール他の審査員を務め、ラジオ、TV出演。数多くのCD、著作、楽譜の出版。英国ケンブリッジ国際伝記センター(IBC)により「最も優秀な100人の音楽家」の1人に選ばれる。千葉県文化功労者。日本音楽舞踊会議代表理事。

【 栗栖麻衣子（ピアノ） Maiko KURISU 】日本大学芸術学部音楽学科ピアノコース卒業後ウィーンにてヴィクトル・トイフルマイヤー、許裕安のもとピアノ演奏及び教育法について研鑽を積む。第12回JILA音楽コンクールピアノ部門第1位。現在各地でソリスト、アンサンブルピアニストとして演奏活動を行う傍らコンサートプロデューサーや後進の指導に携わっている。これまで上田純子、黒川浩、大原裕子、パウル・バドゥラ=スコダ、ウラジミール・トロップ、深沢亮子他各氏に師事。国際芸術連盟専門家会員、日本音楽舞踊会議会員および理事



司会【佐藤 光政 プロフィール】

1966年東京芸術大学音楽学部卒業。1973年第7回パリ国際音楽コンクール入賞。同年、第42回日本音楽コンクール声楽部門第1位入賞。1990年《春琴抄》でフィンランドのサヴォリンナ・オペラフェスティバルに参加。第18回ジロー・オペラ賞受賞。1994年に2枚組CD『佐藤光政 日本の抒情を歌う』を発売。2000年に、『日本の名歌を歌う』を発売。磯谷威、大槻秀元、柴田睦陸、河本喜介の諸氏に師事。二期会、日本オペラ協会、日本音楽舞踊会議、各会員。

# 会と会員の情報

## CMD J 会と会員のスケジュール

11 月

- 2日(金) 清道洋一編曲ほか セントラル愛知交響楽団 第123回定期演奏会 ～秋風やマリアに捧ぐセレナーデ～ ナビゲーター/西耕一【18:45開演 三井住友海上しらかわホール(名古屋) A席4,200円、他】
- 3日(土) 八木宏子、太田恵美子(ピアノ) 第10回「少年ケニア」チャリティコンサート出演: ママドウ・ドゥンビア(コラ)ほか 曲目: 愛の挨拶・モーツァルト: ヴァイオリンソナタ K.301ほか【調布グリーンホール(小) 13:30開演 一般2,500円、学生2,000円】
- 7日(水) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00～】
- 11日(日) 松下佳代子ー ローマ法王午前演奏記念アンコール・コンサート  
【四谷区民ホール 19:00 前売り3,000円 当日券3,500円】
- 11日(日) 日本電子キーボード音楽学会 第8回全国大会  
【文教大学越谷校舎】10:00～18:00
- 16日(金) 北川暁子(Pf.)北川靖子(Vn.)クラシックと能楽【出演: 友枝雄人(能)セルリアンタワー能楽堂(澁谷) 19:00開演 全指定席8,000円】  
問合せ チケットぴあ 他
- 17日(土) 橘川琢作曲ほか 和洋楽アンサンブルTMAP第3回コンサート  
尺八ピアノ二重奏曲《春秋花様》op.42より「薄墨桜」  
尺八: 立花茂生(呂萌山)、ピアノ宮本あんり  
【13:30開演 杜のホール橋本・多目的ホール 2,500円】
- 18日(日) 若い翼によるCMD Jコンサート5  
【すみだトリフォニー小ホール】16:00開演 3,000円(会員無料)  
詳細は44～52ページ掲載のプログラ参照
- 19日(月) 深沢亮子ー「翔の会」公開レッスン  
【10:00コトブキD.I.センター 問合せ: 大山喬子 044-966-5224】
- 20日(火) 原口摩純ー「コンサート&セミナー」  
【東洋英和女学院大学生涯学習センター 10:40～12:10 講座費2,500円 問合せ 東洋英和女学院大学 045-922-5513】
- 23日(金) 福地奈津子(編曲)ー  
エレクトーンオーケストラで奏でるフルートとアノのコンサート  
【ガーシュイン: ラプソディインブルー他南大沢文化会館(八王子市)】  
15:00開演 入場料3,500円  
問合せ: 堀之内ミュージックスタジオ 042-676-9326
- 23日(金・祝) 吉仲京子ー  
～あこのころ このうた～思い出が蘇る懐かしいメロディ～  
出演: 吉仲京子・杵島純子・豊島正伸(うた)、はざまゆか(ピアノ)  
曲: 童謡・教科書(小、中、高)から・昭和歌謡から【救世軍 江東小隊2Fホール】 14:00開演 13:30開場 入場料2,000円  
問い合わせ 03-3622-4786(天羽)
- 23日(金・祝) 清道洋一: 作曲 クラムジカ第8回公演「うつしよの意楽(いぎょう)」clumusica × フルートオーケストラ 湖笛の会 collaboration 曲/清道

洋一：ミナモノキオク 水面の記憶ほか【14:00 開演 しがぎんホール（滋賀県大津市）2,000 円】

27 日(火) 深沢亮子ー共演：上村文乃 (Cello)

シューマン：アダージオとアレグロ 他【朝日カルチャーセンター新宿住友ビル 7 階 13:00 問合せ Tel:03-3344-1945】

30 日(金) 並木桂子ーピアノデュオブリランテ X ～名曲で巡るヨーロッパの旅

出演：並木桂子＋岸 洋子・城 みどり＋味埜裕子【杉並公会堂小ホール】19:00

開演 全自由席 3,500 円 問合せ：デュオブリランテ 03-3729-6877

30 日(金) 清道洋一作曲 30 周年記念

30 周年記念 現代作曲家グループ「蒼」による新作書き下ろし演奏会  
～室内管弦楽による 5 つの着眼～

清道洋一：「Geminis」ほか【18:30 開演 旧東京音楽学校奏楽堂 3,500 円】

## 12 月

4 日(火) 深沢亮子とその仲間による “ピアノと室内楽の夕べ”

出演：深沢亮子 (Pf.) 恵藤久美子 (Vn.) 安田謙一郎 (Vc.)

音楽の友ホール 19:00 開演】入場料 4,500 円 (会員割引あり)

(詳細は、56 ページの次のチラシ参照)

7 日(金) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00～】

9 日(日) 橘川 琢作曲ー第 16 回 詩と音楽を歌い 奏でる「トロッタの会」

詩歌曲『死の花』op. 40【18:00 開演早稲田奉仕園スコットホール 3,500 円】

15 日(土) 室内楽コンサートーシューマン、ドヴォルザークピアノ 5 重奏曲

Pf. 深沢亮子 Vn. 掛橋佑水、井上静香 Va. 中村静香 Vc. 宮坂拓志

主催：(財) 藤沢市芸術文化振興財団【湘南台文化センター市民シアター】16:00 (予定) 問合せ：0466-28-1135

2013 年

## 1 月

7 日(月) 日本音楽舞踊会議 新年会【詳細未定】

12 日(土) 中嶋恒雄(作曲)ー講演会「音楽と思想ー未発表作品の公開ー」2012. 11. 1～

2013. 1. 14・多摩美術大学美術館にて開催中のモノミナヒカル展～佐藤慶二郎の躍動するオブジェ展～のイベント】問い合わせ：多摩美術大学美術館 TEL042-357-1251

25 日(金) 声楽部会公演「2013 年新春に歌う～夢と希望と、そして・・・」

【開演：18:30 料金：2500 円 すみだトリフォニー小ホール】

司会&歌：佐藤光政

歌：浅香五十鈴・今井梨紗子・内田暁子・浦 富美・笠原たか・高橋順子・渡辺裕子

ピアノ：岡 陽子・坂田晴美・島筒英夫・志茂征彦・藤井ゆり・守谷博美・門馬和子

ヴァイオリン：渡辺せいら

27 日(日) 深沢亮子ー 東金文化会館創立 25 周年記念コンサート

ソロと室内楽 共演：Va. 中村静香、Vc. 上村文乃

【問合せ：東金文化会館 0475-55-6211】

27 日(日) 原口摩純ーピティナ北横浜ステップにてトークコンサート

【横浜市青葉公会堂】

## 2 月

7 日(木) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00～】

11 日(月祝) 平成 24 年度 日本音楽舞踊会議定期総会

11 日(月祝) 原口摩純「ランチタイム・コンサート」【名古屋宗次ホール】

入場料 1000 円 問合せ・申込み：宗次ホール 052265-1715

12 日(火) 深沢亮子ー 共演：城代さや香さん (Va.) と。 曲目未定

【新宿住友ビル7F 朝日カルチャーセンター】13:00

問合せ：朝日カルチャーセンター tel 03-3344-1945

12日(火) 原口摩純—東洋英和女学院大学「コンサート&レクチャー」

10:40~12:10 講座費 2,500円 問合せ：東洋英和女学院大学 045-922-5513

18日(月) 動き、舞踊、所作と音楽Ⅱ

【すみだトリフォニー小ホール 出品募集中】

3月

7日(木) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~】

12日(火) 深沢亮子— 共演：中村静香さん(Vn.)と。曲目未定

【新宿住友ビル7F 朝日カルチャーセンター】13:00 問

合せ：朝日カルチャーセンター tel 03-3344-1945

28日(木) 深沢亮子— シューベルト幻想曲(連弾) 他共演：草野明子

【19:00 ヤマハ銀座コンサートサロン】03-3572-3132 (ヤマハ銀座店)

4月

1日(月) 原口摩純 & 石川寛~ソロとデュオのリサイタル~

ブラームス：Pf.とVn.の為のソナタ第1番「雨の歌」他【東京文化会館小ホール 19:00 開演 一般 3,500円 日本音楽舞踊会議後援】

5日(金) CMDJフレッシュコンサート2013

~より豊かな音楽の未来をめざして~

【すみだトリフォニー小ホール 18:30 開演 2,500円】

《詳細企画中》

8日(月) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~】

5月

23日(木) 深沢亮子— 曲目未定 共演 藤井洋子(Cl) H. ミュラー(Va)

【19:00 小金井市民交流センター】 問合せ：042-387-7728 (鈴木)

6月

14日(金) 作曲部会公演【すみだトリフォニーホール小ホール】詳細未定

7月

4日(木) ピアノ部会公演【杉並公会堂小ホール 19:00 開演】

(詳細未定) 出演者募集中

5日(金) 声楽部会公演「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」(仮称)

【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定

21日(日) 「翔の会」20周年記念コンサート 深沢亮子賛助出演

【浜離宮朝日ホール 13:30】

9月

16日(月) 深沢亮子—デビュー60周年 連弾と2台のピアノ作品による 共

演：野原みどり、小沢麻由子、五味田恵理子 予定 モーツァルト、ドビュッシー、フォーレの作品【浜離宮朝日ホール】14:00 問合せ：03-3561-5012

(新演奏家協会)

26日(木) CMDJ 2013年オペラコンサート【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定

10月

28日(月) 様々な音の風景X~20世紀以降の音楽とその潮流~

【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定

## 編集後記

本会にとって、創立 50 周年に当たる 2012 年も、あと残すところ 2 ヶ月足らずとなりました。9 月 21 日（金）に始まった、本会主催の秋の催は、先月『様々な音の風景Ⅴ』が終わり、今月の 18 日には第 3 弾、『若い翼によるCMDJコンサート 5』が開催されます。将来姓のある若い人に混じって、実績のあるベテラン会員の参加もあり、聴き応えのあるコンサートとなることが期待されますので、多くの方々のご来場をお待ちしています。先月 21 日には、長期間難病と闘って来た松下佳代子さんが、奇跡的に回復して演奏会を開きました。音楽をする喜びに溢れた彼女の演奏に接し、「長い夜が続いても諦めることなく、耐えて待ち続けられれば、必ず再び光が訪れるものではないか」と勇気づけられました。我々も希望を失わずに、一步一步前に進みたいと思います。

（編集長：中島洋一）

### 本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川琢 高橋通 湯浅玲子

編集部員：新井知子 浦富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 小西徹郎 高島和義 高橋雅光  
戸引小夜子 北條直彦

### 音楽の世界 11 月号(通巻 543 号)

2012 年 11 月 1 日発行 定価 500 円(本体 476 円)

発行人：芙二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-1-6 寿美ビル 305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP：<http://cmdj1962.com/> E-mail：[onbukai@mua.biglobe.ne.jp](mailto:onbukai@mua.biglobe.ne.jp)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> (アーカイブ)

A/D：音楽の世界編集部 Tel：(03)3369 7496 印刷：イゲタ印刷(株) Tel：(04)7185 0471

購読料 年間：5000 円 (6 ヶ月：2500 円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

\*日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

\*乱丁、落丁がございましたらお取替えします